

# 小田原史談

第241号

発行所 小田原史談会  
小田原市東町1-21-18  
平倉方 TEL (34) 8363

## 小田原桐座について(一)

— 由緒書の検討を中心に —

荒河 純

桐座といえは、江戸の中村座・市村座・森田座の本櫓に次ぐ控櫓として、河原崎座、都座と並んで江戸時代後期に本櫓に代わり歌舞伎興行したことが、『歌舞伎年表』(1)をはじめとする歌舞伎関連の資料に見られる。しかし、小田原に存在したもう一つの桐座に関しては、歌舞伎史の中で触れられることがなく、地元の一部でしか語られていなかった。

小田原桐座は、小田原城の鬼門にあたる井細田口を出て直ぐの旧荻窪村、甲州街道沿いにあった。

図1には、現代の地図上で桐座のあった位置を示した。この場所に舞台が設置されたのは江戸時代の初期といわれ、明治の末まで興行が行われていたが、次第に興行はなくなり、関東大震災で建物自体も倒壊したとい

う。地元では、江戸時代には、小田原桐座はきわめて由緒ある劇場であったという認識がある。

松隈匡輔は大正九年に出版した『小田原の史実と伝説』のなかで「桐座は江戸役者の大阪上り上方役者の江戸下りには必ずこの舞臺を踏むのが吉例だったので、梨園社會ではこの座を出世舞臺と云つてゐたのである」と述べている(2)。

戦後、演劇史の観点からこの問題に最初に着目したのは、演劇評論家で劇作家の木村錦花であった(3)。木村は、小田原桐座で行われていた桐尾上の舞を再興したいという強い想いからかつて歌舞伎座の支配人を務めた経験を持つ当時の小田原市長、鈴木十郎に働きかけた。この問題に大きな関心を持った鈴木は、桐座名跡再興をはかると同時に、

小田原図書館長であった石井富之助に資料収集を依頼した。そして石井は、桐家の元となる大橋家略系図を含む『劇場桐座由緒書』(4)や、江戸桐座の桐大蔵の墓を小田原大橋家の墓所に発見した。木村と石井の調査により、小田原桐座は、江戸時代には城主の庇護を受けながら舞や芝居興行を行ってきたこと、近世初期以降は女舞の桐尾上の桐家が女舞太夫として大橋家から分家するかたちで独立して桐座の座元になったこと、江戸の桐座とはいくつか接点が見いだされることなどが明らかになった(5)(6)。

このように小田原桐座に関するこれまでの研究は、地元に関わりの深い文化人が、風化しつつある歴史を掘り起こし、地元の文化財の価値を再構築し顕彰するという志向が見られる。そのため、江戸桐家と小田原桐家で、どちらが本家で分家かというところ論点が集まる傾向が見られた。近年、内藤浩誉は江戸と小田原の桐家を統合するキーパーソンとして桐大蔵に着目し、江戸、小田原という限られた地域ではなく関東全体での活動という観点からとらえる試みを行っている(7)。江戸の桐家と小田原の桐家を一つの桐家と見な

二百四十一号(平成二十七年四月号)

### 目次

小田原桐座について(一)

— 由緒書の検討を中心に —

荒河 純 . . . . . 1

史談再録<sup>⑧</sup>

明治以後 小田原劇場物語(一) 桐座

石井富之助 . . . . . 6

小田原の郷土史再発見

飯山家文書に見る小田原の

農民一家五代の物語

石井啓文 . . . . . 8

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝 . . . . . 11

久所のむかし話

宮原諄二 . . . . . 12

「片岡日記」昭和編(二)

片岡 永左衛門 . . . . . 16

宮之前的山田呉服店(下)

山田 彰夫 . . . . . 17

小田原大秘録 第九回 卷三の二

鳥居 泰一郎 . . . . . 20

初詣「池上本門寺」と

「六義園・日本民芸館」

田中 豊 . . . . . 23

聞き耳「倒判(さかさはん)」

植田 士郎 . . . . . 25

小田原の街角写真今昔<sup>④</sup>

植田 士郎 . . . . . 26

新会員紹介 . . . . . 5

平成二十七年 総会・講演会お知らせ

史跡巡り案内 . . . . . 27

第九回史談会セミナー予告 . . . . . 27

特別賛助会員・落穂集 . . . . . 28

して全体の活動を考えたとき、さらに論証すべき課題は多い。

また、江戸時代初期から幕末まで、女歌舞伎を含めた女芸人に対する禁令が全国的に施行され、そのため若衆歌舞伎、女方へと変遷していったのは歌舞伎史上周知の事実である。それにも関わらず、桐座ではこの時代を通して、代々女舞の桐大蔵、桐尾上、桐長桐といった女性が何故座元をつとめてきたのか、という基本的な疑問点に関してはこれまでの研究では触れられていなかった。

このように、小田原桐座に関しては謎が多い。しかし、これらの謎を解くための基本史料としては、これまで唯一、桐家(天

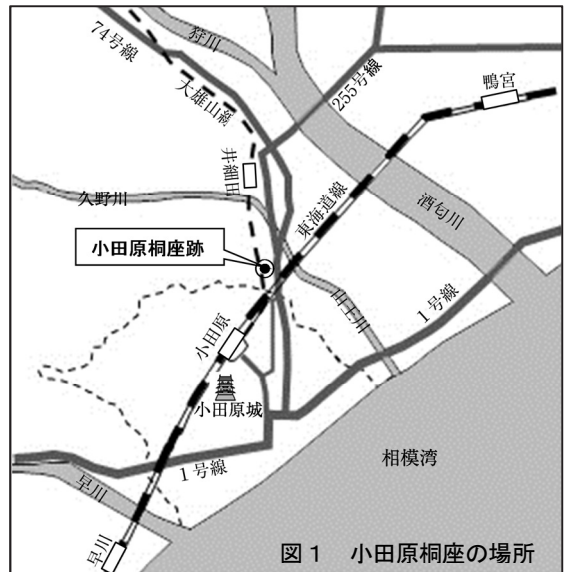


図1 小田原桐座の場所



図2 こより絵として復元された小田原桐座の景観 (津田久次郎氏製作)

橋家の由緒書しか見つからないのである。そこで本稿では、小田原桐家の由緒書の内容、作成意図などを、桐家を取り巻く各時代の政治社会的、文化的状況を重ね合わせながら詳細に検討することで、演劇史における小田原桐座の位置づけを明らかにしようと試みるものである。

### 一、小田原と江戸両桐家の関係

#### (一) 由緒書の成立

由緒書は戦国期の職人集団の活動に遡る。久留島典子は、「由緒書作成とは、自らの集団の姿を歴史化して自他の差異化を図る行為である」としている(8)。

由緒書はこのような性格を持つため、従来の歴史学では偽文書

の類として扱われ、歴史的な信憑性に欠けるとして研究素材とはなりにくかった。しかし近年になって、文書の真偽を明らかにすることで有用な情報が得られるとして、研究対象とすることが行われるようになってきている(9)。

さて、先人が遺した由緒書を扱う場合の注意点に留意した上で、実際の小田原桐家(大橋家)の由緒書を見てみることにする。

この由緒書は、桑原家、大橋家そして桐家がつながる系図に、各代における主な事蹟が付記された家譜と、その時々々の権威を保証した十編の文書から成っている。

表紙は「劇場桐座由緒書」というタイトルと、これを制作した大橋林当の名が記されている。家譜の最後に「右之通略先祖書写畢 相模國足柄下郡荻窪村 大橋林当 明治十四年十月」と記されているところから、この由緒書の最終的な成立は明治十四年である。しかし、この日付はあくまでそれ以前に書かれたものを編纂した日を示すものであり、随時書き継がれることで由緒書ができあがったものである。動機と内容から推定するに、由緒書の主要な部分が書かれた時期は、三度あると考えられる。

一回目は、江戸時代初期の大橋金太夫政道によって為された

ものである。それまで出稼ぎ芝居で糊口をしのいできた大橋家が、政道の代になって、江戸の桐大蔵と組んで江戸で常芝居を出願する。これは、由緒書中の文書のなかに「(前略) 其後大橋政道寛文元年二月江戸表江罷出 桐大蔵ト共ニ木挽町ニ於桐座名目ノ櫓ヲ上ケ歌舞伎芝居興行常座願候処御聞濟ニ相成候也」とあることから分かる。これに相当する願書本文は見つかっていないが、おそらく菅原家を先祖とする云々はこの時に書かれたのではないだろうか。家譜の中の政道の項に「父政氏古来記有之大橋家先祖菅原家筑前国以来舞家ナリ」という一文が現れていることがそれを示唆している。

二回目に由緒書を積極的に活用したのは、江戸時代後期の大橋四郎治義友である。これは水野忠邦の天保の改革で中止された芝居興行の復活、および新興都市横浜への進出を狙ったものであるが、これらに関しては、後の章で詳細に述べる予定である。この時、義友が由緒書としてまとめたと思われるものが、笹野堅により昭和十八年に刊行された『幸若舞曲集』に収載されている。これによると、嘉永二年(一八四九)八月に尋ねに応じてまとめ直したものである(10)。

三回目は、明治に入ってから

大橋林家によって編纂された。

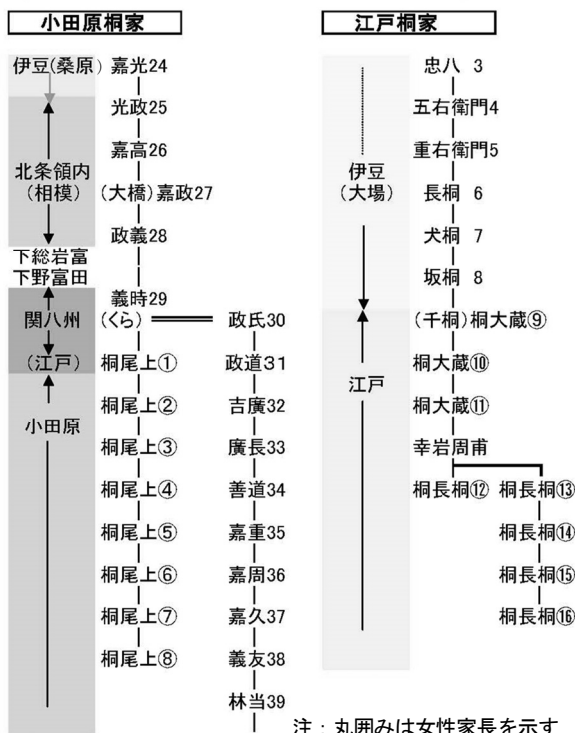
文明開化の世となり、西洋の演劇に関する情報が入るようになると、歌舞伎の荒唐無稽な筋立てや、興行の前近代的な慣習などを批判する声が高まり、明治五年には芸能に関する旧慣習除去が布告された(11)。そのため、劇場興行に新たな鑑札が必要となり、明治六年(一八七三)二月この鑑札取得のため、足柄県庁からの尋ねに応じて古来の由緒書を簡潔にまとめて提出している。

して自らのものも興行権を維持するために作成されたものと見ることが出来る。

(二) 中世における両桐家

小田原桐家の中世以前であるが、系図が菅原道真から始まっているのは由緒書の常識からして創作と考えてはば間違いないだろう。鎌倉、越中、筑前における桑原氏についても他に資料が無いので確かめようが無い。そこで、室町時代以降の小田原桐家と江戸桐家の系図を、年代が出来るだけ合うように対比させて示したのが表1である。小田原桐家の祖である桑原氏は、桑原光政の代に「関東に下向した」と由緒書には記されて

表1 小田原桐家系図と江戸桐家系図の対比 (筆者作成)



注：丸囲みは女性家長を示す

いるが、『小田原旧記』に現れる伊豆衆二十家中の桑原氏と関係ある可能性を、内藤は前掲論文の中で指摘している(7)。伊豆の桑原郷(現函南町桑原)は、平安、鎌倉時代の仏像が多く遺されている歴史ある村落であること、戦国時代末期にはこの近くには後北条氏の西の砦というべき山中城が築かれたことなどから、伊豆における重要な拠点の一つであったことがうかがえる。舞の桑原氏が伊豆衆の桑原氏と同じ一族であったとすると、彼らは伊豆に古くから住んでいた土豪であった可能性が高い。鎌倉、筑前に住んだというのは、菅家や鎌倉北条氏との関係を偽装するための創作であろう。

次は桑原五郎左衛門嘉高の名前が北条五代記に現れることや、氏綱からの朱印状も遺っていることで、相模国移住以降の系図は信用できる。由緒書によれば、桑原嘉高が先ず小田原に移住したのは大永三年(一五二三)、北条氏綱の代である。氏綱は神仏に信仰が篤く、相模、伊豆における多くの社寺の増改築を行い、里見義堯によって焼かれた鶴岡八幡宮も造営している。宮が完成した天文九年(一五四〇)には、桑原嘉高は氏綱の命で、八幡宮社殿にて法楽舞を勤めている。また、天文十一年の社参(氏康と

思われる)の折にも嘉高が法楽舞を舞っていることが先の由緒書に記されている。しかし、『小田原衆所領役帳』によると、桑原嘉高は御馬廻衆という直属の家臣団に属し、中郡乳牛(現在の秦野市置屋付近)に、四十二貫余の所領を持っていることになっている(12)。また、氏綱から賜った虎朱印状では兵糧の輸送を依頼されており、特に舞太夫などの呼称も付いていないことから、舞を専業としていたわけではないことが推定される(13)。

嘉高の子、嘉政の代になって大橋への改姓が行われている。改姓の理由、何故「大橋」という姓になったのかは明らかでないが、舞職への専業化と関わりがあるものと考えられる。それは、嘉政の子の嘉義が氏康、氏政に寵愛され、度々法楽舞を仰せつかっており、北条氏政から諱の一字を賜って治部左衛門政義と改名している。政義からは代々舞太夫職という肩書きが由緒書にも現れており、舞太夫職の専業化を示していることから推察されるのである。

大橋治部左衛門政義の代に小田原は落城を迎えるが、由緒書によれば、政義はこの四年前、氏政息女が歌舞を懇望したため、嫁ぎ先である北条氏勝の玉繩城

(現鎌倉市城廻)に移った、とされてい。しかし、氏勝の室は上田朝直娘であり、氏政の娘で氏勝室になったものも見当たらない(14)。事実、次に示す『戦國遺文・後北条氏編』(相州文書所収)の文書では(15)、北条氏繁の後室(氏勝の母)となっていることから、歌舞を懇望したのは、氏勝の母すなわち北条氏康娘の七曲殿であったことが分かる。

○二九八八 北条氏繁後室カ朱印状寫

彼まいまいちふさえもん、  
玉なわさま御ひくわん二候  
あいた、東郡中ニおゐて、  
よこあいひふん有間敷候、  
若ひふん申ものこれあるニ  
おゐてハ、御印判をさきと  
して可申上候者也、仍如件、  
丙戌 八月廿日

大はし ちふさえもん  
四年後の天正十八年(二五九〇)小田原合戦で氏勝は当初、山中城に援軍として入城したが、豊臣軍の猛攻で落城後は小田原籠城には加わらず、玉繩城に戻り、まもなく豊臣軍の別働隊に投降した。そして北条氏滅亡後、氏勝は家康の家臣となり下総岩富(弥富、弥留ともいう)(現佐倉市)一万石を拝領した。その後の岩富藩は実子の氏明、保科家からの養子の氏重へと代替わりし、氏重の代に移封となって下野富

田藩(現栃木市)一万石の城主となつてい。大橋治部左衛門政義とその子の六兵衛義時は、この玉繩北条氏の岩富、富田時代には行動を共にしたことが、次の相州文書および由緒書の文書から分かる。

○四三三八 北条氏勝判物寫  
我々知行分、似合之勸進可致  
之候、無相違候也、仍如件、  
十一月廿三日 彌留

氏勝(花押)  
舞々治部左衛門殿

○四三三三 北条氏明判物寫  
彌留知行分、似合之勸進可致  
之候、無相違候也、仍如件、  
卯月四日  
氏明(花押)  
舞々治部左衛門殿

如前々之我等家中へ出入致似  
相之勸進可致之無相違者也  
富田領

慶長十九 九月十六日  
氏重(花押)  
大橋六兵へとの

これら、小田原桐家(桑原家、大橋家)の動向を整理すると、元々伊豆の土豪で舞を兼業していた桑原氏は、北条氏綱の大永年間に相州に移り、鶴岡八幡宮で法楽舞を勤めている。後北条氏滅亡時には玉繩北条氏と行動

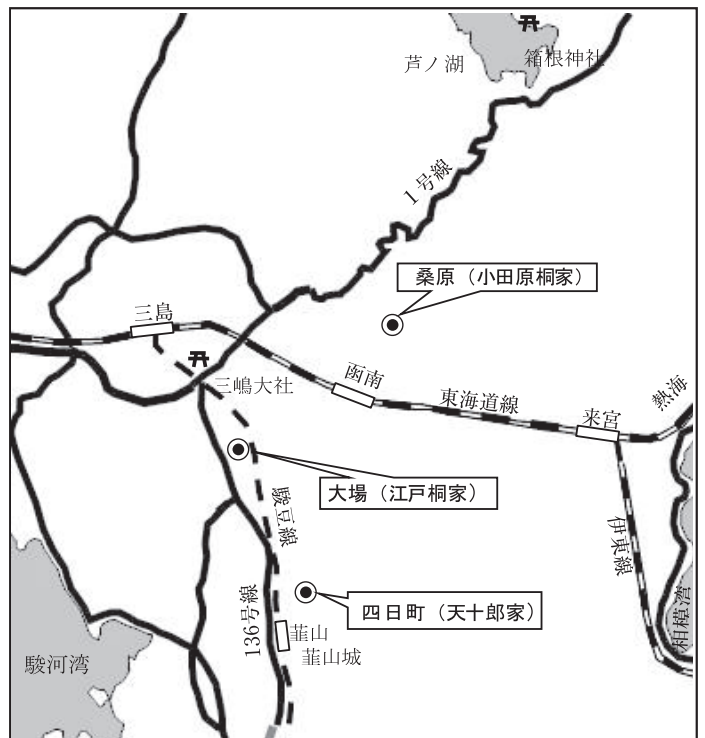


図3 伊豆における小田原桐家、江戸桐家、天十郎家の位置関係

を共にし、江戸時代に入つてから岩富藩、富田藩と移つてい。氏綱の頃、桑原氏に代わつて伊豆で舞太夫を勤めたのは、天十郎家であった。天十郎という名前は早雲から賜つたものであるが、大永八年(二五二八)氏綱によって正式に舞職として認められ、豆州四日町に屋敷を与えられた。しかし、氏康の代になると、天十郎家も小田原に移り、弘治元年(二五五五)頃には「相州天十郎」と呼ばれていたことが『相模国風土記稿』に見える(16)。

その後、三島から伊豆の舞職を任されていたのが、江戸桐家を共にし、江戸時代に入つてから岩富藩、富田藩と移つてい。氏綱の頃、桑原氏に代わつて伊豆で舞太夫を勤めたのは、天十郎家であった。天十郎という名前は早雲から賜つたものであるが、大永八年(二五二八)氏綱によって正式に舞職として認められ、豆州四日町に屋敷を与えられた。しかし、氏康の代になると、天十郎家も小田原に移り、弘治元年(二五五五)頃には「相州天十郎」と呼ばれていたことが『相模国風土記稿』に見える(16)。

の祖である幸岩家であった。江戸桐家の由緒書は、その流れをくむ舞踊柏木流の柏木春秋によって調査され、その祖は幸若舞の越前国、幸若小八郎の弟子である幸岩與太夫であるとされている(17)。

天文十四年(二五四五)、三河国岡崎領主、松平広忠の家臣であった岩松八弥が、過酒乱心によって主君に斬りかかるという事件が起こつた。八弥とその一子は直ちに誅されたが、その孫は幼少のため助命され、越前幸若舞の幸若小八郎の弟子となつた。その後、その子は舞太夫となり、

師の苗字と自らの苗字を合わせて、幸岩與太夫と名乗ったとされている。このことから、「幸若」はあくまで芸名で、俗名は「幸岩」であると、柏木香秋は述べている(17)。

舞太夫となった與太夫は、三州や駿府で舞を勤めたとされるが、江戸桐家田緒書によると幸岩與太夫は伊豆国大場村(現市大場)に住んでいたことになっている。事実、石井富之助によれば、三代目、忠八(與太夫の子)は三島神社(現三嶋大社)の舞人であったことが示されている(18)。

では、幸岩家はいつ頃伊豆に移って来たのであろうか? それを示唆する史料は見つかっていないが、おそらく、氏康の四男、北条氏規が葦山城主となった、永禄九年(一五六六)頃ではないだろうか。氏規は今川家に人質として出されていた時期があり、その時同じ人質であった徳川家康と交流があった。その後、氏規は三州や駿河と縁が深く、その間に幸岩與太夫と知己があった可能性が高い。さらに、幸岩家が康の松平家と深い因縁があることも、当然周知のことであった。家康の父である松平広忠が助命して育てた幸岩與太夫を、敢えて招くことに意味を見いだせるのは、北条家の中では氏規以外考えられないのである。

また、三島神社の宮司であった矢田部家に伝わる、寛文九年(一六六九)に記された日記に、二代目の幸岩與惣太夫が天文年間に三島囃子の曲を創ったとされている(19)。これは先の三河関係史料とは年代がずれており、今後の検討が必要である。

伊豆で幸岩家が住んでいた大場村の場所は、三島から葦山に向かう下田街道沿いで、三島神社と葦山城のほぼ中間地点である(図3)。幸岩忠八が住んでいた頃の葦山城には北条氏規が居住しており、幸岩家は三島神社の舞太夫でありながら、葦山城の氏規のところにも出仕していたのではないだろうか。

従って、後北条氏の最盛期である北条氏政の代には、鎌倉に大橋家(桑原家)、小田原に天十郎家、葦山に幸岩家が舞太夫としてそれぞれの地域を分担していたものと考えられる。時期は重なってはいないが、この三家とも、同じ伊豆の三島から葦山の間の狭い地域で活動していたことは注目に値する。

図3には、小田原桐家の前身である桑原家の桑原、江戸桐家である幸岩家の大場、天十郎家の四日町を、現在の地図上で位置関係を示した。

その後、小田原桐家と江戸桐家が同じ桐の紋を使い、代々女

舞を座の看板にするという共通の土壌は、この葦山時代に培われたものであろう。(つづく)

注

- (1) 伊原敏郎『歌舞伎年表』第四巻、岩波書店、一九五九年
- (2) 松隈匡輔「桐座」『小田原の史実と伝説』特輯号、求信堂書店、一九二〇年
- (3) 木村錦花「小田原桐座の発見」『神奈川県文化財調査報告』第12集、神奈川県文化財協会、一九五四年
- (4) 石井富之助「劇場桐座田緒書」『神奈川県史研究』第9号、神奈川県企画調査部県史編集室、一九七〇年
- (5) 石井富之助「小田原の桐座」『神奈川県史』各論編三、一九八〇年
- (6) 中根賢「小田原市史」通史編・近世、一九九九年
- (7) 内藤浩登「小田原「桐大内蔵」の活動と変遷」『藝能』十六号、二〇一〇年
- (8) 久留島典子「二揆と戦国大名」(日本の歴史13) 講談社、二〇〇一年
- (9) 網野善彦「偽文書をめぐって」久野俊彦編『偽文書学入門』柏書房、二〇〇四年
- (10) 笹野野「幸若舞曲集・序説」第一書房、一九四三年
- (11) 『法令大書』明治五年巻、内閣官報局、一九二二年
- (12) 佐脇栄智「小田原衆所領役帳―戦国遺文後北条氏編別巻―」東京堂出版、一九九八年
- (13) 『松田氏関係文書集』南足柄市史編集委員会、一九九一年
- (14) 黒田基樹『北条早雲とその一

- 族」新人物往来社、二〇〇七年
- (15) 杉山博、下山治久『戦国遺文・後北条氏編』第四巻、東京堂出版、一九九二年
- (16) 蘆田伊人編『新編相模国風土記稿』第二巻、雄山閣、一九五五年
- (17) 柏木香秋「桐座(江戸・四谷)幸岩桐家」『参考資料』池田長治発行、一九六九年
- (18) 石井富之助「小田原桐座の研究」未発表原稿、一九七四年
- (19) 左記URL、2015.3.12アクセス  
<http://www7.pala.or.jp/mizu000/mishimabayashi.html>

新会員紹介

- 名前(敬称略) 住所
- 本田 亮 小田原市前川
- 星野 和子 小田原市扇町

会員の方へお願い

―新規会員募集―  
小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方には是非会員になっただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元です。

小田原市堀之内三二一―一五  
電話 〇四六五―三七七―一八八

植田士郎

## 明治以後 小田原劇場物語(一) — 桐座

### 石井富之助

はしがき

演劇や映画が市民生活の中で大きな役割をになつていくことはいつの時代においても言えることであろう。ところが、それが余りにも身近かなものであり、日常的でありすぎるためか、地方においてはほとんど記録がなく、その変遷、推移を探ることはなかなか容易でない。

幸い、小田原には写本「劇場桐座由緒書」、中川初太郎氏の「桐座記録」、安藤正作氏の「小田原の芝居の思い出」「小田原映画五十年史」その他磯部平七氏の覚え書等があつて、どうやらその歴史を辿ることができよう。そこでこれらの資料にわたし自身の見聞を加え、一つのまとまつた資料としておこうと試みたものが本稿である。

#### 一、劇場附寄席

##### 1 桐座

「声色は小田原までは通用

し」という古川柳がある。

天下の嶮箱根は江戸への関門であつたから、ここを嚴重に固めるために徳川氏の小田原に三河以来の譜代大名である大久保氏を置いたわけで、小田原までは江戸のうち、箱根を越えた旅人が小田原に着くと、江戸はもうすぐと考へたものであつた。

だから、何でもかんでも箱根が境になつていて、江戸の千両役者の声色も小田原までは通用するが、箱根を越えたらわからないというのがこの川柳の解釈であらう。

小田原までは身内だといふくらい軽い意味だけでこの解釈はよいのかも知れない。しかし、よくよく考へてみるとこれだけではどうも納得しがたいところがある。去る十月一日(昭和三十九年)に開通したばかりの東海道新幹線に乗れば、たった四十五分で東京へ行けるといふ便利な世の中に

なつても、声色がわかるほどにそう度々東京へ観劇に出かけることは容易でない。まして江戸時代に途中戸塚から程ヶ谷あたりに一泊して、二十一里の道を芝居見物に行くことなどは思ひもよらない。

ところが、小田原にはこの川柳に詠まれている通り、声色がわかるほどではないにしても、江戸の名優の芝居をしばしば観ることのできる機会があつた。

それは小田原に桐座という立派な劇場が江戸の初期からあつて、上り下りの名優はもとより、箱根へ湯治にきた江戸の役者は度々ここで興行を行なつていたからである。

そんなわけで、小田原の人たちは、何もわざわざ江戸まで行かずとも、結構一流の江戸歌舞伎を観ることができ、したがって芝居通も相当にいたと考へられる。「声色は小田原までは通用し」というのは案外こま

まのことを詠んでいるのかも知れない。

この桐座は昔の城下町を南北に貫く甲州街道を北に行き、いわゆる御府内を一歩外に出た寺町というところにあつた。その発祥年代はいまだ詳かにし得ないが、記録によれば寛文六年以前はすでに存在していた

ことは事実で、江戸を中心とする関東の劇場の中で最も古いものに属することが知られる。

座主は桐尾上という女舞太夫で、寛文六年、桐大内蔵とともに江戸木挽町で桐座の櫓をあげて歌舞興行を行なつていくが、これまた関東出身の女歌舞伎の始ともいふべきものとして注目に値する。

しかも、桐尾上の本家である大橋家は大永三年、北条氏綱の時代に小田原に來住して以来、代々北条家の舞太夫職として仕え、北条氏没落後も大久保、稲葉等の各城主から同様の処遇を受けるとともに名字帯刀も許されたりして、連綿として明治に及んでいる家柄である。桐家は代々尾上を襲名し、女舞太夫を相続し、本家を共同経営者として桐座を経営してきたのであるが、歌舞伎関係の者がいわゆる河原者として蔑視された時代にあつて、ひとり桐座のみが特別な地位を保持していることは他に類例を見ないところである。

かくの如く、桐座は由緒古く、日本演劇史上において特異な存在であつたにもかかわらず、最近では桐家の名跡すら忘れられようとしていた。小田原市長鈴木十郎氏ならびに演劇研究家、

劇作家として知られた故木村錦花は深くこれを惜しみ、相計つて昭和三十一年桐家名跡保存会を結成し、元帝劇の名女優として知られた森律子に桐大内蔵同じく村田嘉久子に桐長桐、小田原出身の加藤澄代に桐尾上の名を贈り、その襲名披露公演を箱根湯本の観光会館で開催したことはよく人の知るところである。また木村錦花氏はこれと時を同じくして、神奈川県文化財調査報告書に「小田原桐座の発見」と題する研究を発表して、桐座の全貌を明らかにした。

しかし、それ以後桐座関係資料が相当発見されてきたので、この研究はわたしが継承して現在に至つているのであるが、この間に、天明四年江戸で市村座の控櫓として興行した、幸若与太夫を祖とする桐長桐の桐座との関係も次第に分明してきている。

これら桐座についての詳細は「小田原桐座の研究」と題して発表しようと考えているので、ここでは明治以後の桐座について大体を述べることに止めておこう。

「劇場桐座由緒書」を見ると、明治以前に一つだけ紹介しておきたいことがある。それは安政六年に桐座

が横浜進出を企図したことである。

安政六年五月武州神奈川横浜に於て外国交易開港の節先祖よりの由緒書並びに吉例出稼興行の件を以て、横浜表外国奉行村垣淡路守様へ願上候処、同年七月願済みの上新地拝借致候。則ち旧弁天通に於て五十間四方の地を拝借仕り、右場所に於て表間口十五間、奥行二十三間の舞台小屋建て常芝居興行可致之処、小屋普請金主半途にて異変に相成り、依之右の拝借の場所其儘地上に致候

といふことでこの劇場建設はついに挫折してしまつたが、同じ安政六年には畑宿の本陣茗荷屋畑右衛門が本町一丁目大通りに湯本細工のスーパーニヤ・ショップを開いている。開港をあつてこんで横浜へ横浜へと草木もなびいた、当時の有様が思い浮べられて興味深いものがある。

桐座はさらに

明治五年申年二月、同国大住郡伊勢原村組合廿五ヶ村大惣代神戸村名主吉川正治より願に依て、右伊勢原村に当桐座出張として分座致具候趣に付、足柄原庁に願上候処早速御聞済に相成候間、右場所に桐座名儀を以て櫓を

上げ、年内春秋両度づつ興行致候、其後御改正以來右場所打止候とあるように伊勢原にも分座したりして、外部進出になかなかの意欲を見せているが、本元の小田原桐座はどうなっていたか。

明治の始め御一新に付、女舞太夫御廃しに相成、依之尾上名籍を廃し大橋浦太郎同居人となるなり。尤桐座芝居狂言座の儀は古来の儘有之也

すなわち、この時桐家は廃絶して尾上は本家の方へ帰ったのであるが、芝居興行は従前通り行なうというのである。

しかし、それから明治十八年に至るまでの記録は全くなく、桐座の道具方であつた中川金太郎、初太郎父子の書きとめておいた覚書「桐座記録」は明治十八年八月の柿茸落から書き始められているのである。なぜ改めて開場式をやることになつたかというと、

今は住宅地の桐座跡



その頃すでに大橋家では桐座を維持することが出来なくなり、桐座は寺町全体が引き受けたのであつたが、これも永續させずさまに廃絶の悲運に陥ろうとしていた。しかし、この由緒ある劇場をつぶすのは遺憾だといふことで、磯崎半次郎、同大二郎、石井音二郎、中戸川忠三、小瀬村伊兵衛の五氏が協同して劇場を改築し、華々しく開場したものであつた。

柿茸落は大阪の中村福助一座で、主な顔触れは坂東彦十郎、坂東秀調、坂東鶴之助、中村政次郎。出し物は、だんまり市原野・今川大合戦・那須与市西海碗(乳母争)・寿曾我対面であつた。

なお当時の桐座の規模は総坪数四百八十五坪で、立家二階棧敷二百八十坪、仕切場一坪、花道五尺八間、舞台間口九間奥行四間半、廻し舞台四間、せり出し六尺九尺一ヶ所、スッポンせり三尺四方二ヶ所、楽屋二階二間十二間、太夫座二坪、床山二坪、役者部屋二十二坪、衣裳部屋四坪、大小道具部屋三坪その他といふものであつた。

桐座はこうして開場をしたものの、もともと小田原の町を一步外に出た不便なところ建てられたものであるから、次第に客足が遠

くなり経営不振になるのは当然で、この時以来、幾度か経営者が変わり、苦難の途を辿つて、大正の初めにはついに青物市場に売却されるに至つた。その後、また有志者に買い戻されて劇場となつたが、これまた成績不振を極め大正十二年九月の関東大震災によつて倒壊後は再びその姿を見ることはできなくなつたのである。

これらの変遷の詳細については、先にも述べたとおり後日明らかにするつもりであるので、ここでは一応この程度にとどめ、最後に明治十八年以後の主たる興行を列挙しておく。

- 明治二十年八月、市川九蔵一座
- 市川九蔵・沢村訥子、沢村源之助、沢村源平
- 伽羅先代萩(花水橋より御殿床下、対決刃傷まで)・時今也桔梗旗揚(本能寺より馬鬘、太功記十段目まで)
- 明治二十四年三月、川上音二郎一座
- 川上音二郎、若宮万次郎、金泉丑太郎、青柳捨三郎、佐藤蔵三、藤沢浅次郎
- 経国美談・大井憲太郎・島田一郎梅雨日記・辰氣楼将来日本・五大州・西郷隆盛警勢力・余興演説 オッペケペー

- 明治二十四年八月、坂東家橋一座
- 坂東家橋、中村富士郎、板東竹松・尾上栄三郎、中村右多作、中村勘五郎
- お目見得だんまり、富治三升扇曾我・近江源氏先陣館・伊勢音頭恋寝刃
- 明治二十五年八月、市川左団次一座
- 市川左団次、市川荒次郎、市川米蔵、市川鏡升、市川紫若、市川時若
- 慶安太平記、神靈口渡、籠釣瓶花街酔醒
- 明治二十六年四月、望月正義、村田正雄一座
- 望月正義、村田正雄、竜井鉄骨、金子仙之助、望月梅子
- 清水定吉、相馬事件
- 明治二十六年八月、中村芝翫一座
- 中村芝翫、片岡市蔵、中村福助、坂東秀調、中村福助、中村児福、片岡松童
- 月欠皿恋路宵闇、菅原伝授手習鏡、八陣守護
- 本城、京人形
- 明治二十七年一月、山口定雄一座
- 山口定雄、本田小一郎、佐藤幾之助、津坂幸一郎、酒井某
- 大悪僧
- 明治二十八年、沢村訥子、尾上幸蔵一座

- 。沢村訥子、尾上幸蔵、沢村百之助、市川小団次、沢村源平、沢村宗三郎、沢村春之助
- 。有馬猪鬃動、刈萱桑門筑紫髯
- 明治二十九年、市川九蔵、市川紅若一座
- 市川九蔵、市川紅若、岩井松之助、市川猿三郎、市川茂太郎、市川喜猿
- 。坂名手本忠臣蔵、鎌倉三代記、明烏夢泡雪
- 明治二十九年、沢村訥子一座
- 。沢村訥子、沢村源之助、沢村宗三郎、中村種五郎、沢村長五郎
- 。伊達騒動
- 明治二十九年、角藤定憲一座
- 。角藤定憲外五十名
- 。小田原出兵、騎兵小野田勝三郎名譽戦死
- 明治三十四年、坂東鶴之助一座
- 。出世景清、勧進帳、おその六三
- 明治三十九年三月、尾上菊五郎一座
- 。尾上菊五郎、尾上梅幸、尾上松助、尾上菊雄、尾上菊二郎、尾上蟹十郎
- 。夜討曾我・紅葉狩、清水一角、摂州合邦辻、俠客御所五郎蔵
- 明治三十九年八月、中村又五郎一座
- 。中村又五郎、尾上幸蔵

- 。伽羅先代萩、伊勢音頭恋寝刃
- 明治四十年八月、中村吉右衛門、沢村宗十郎一座
- 。中村吉右衛門、沢村宗十郎、市川猿十郎、中村吉之丞、沢村百之助
- 。朝比奈門破、奥州安達原、伊勢音頭恋寝刃
- 明治四十二年八月、市川女寅一座
- 。市川女寅、市川男寅、片岡十蔵、市川九団次
- 。だんまり、源平布引滝、川中島(輝虎配膳)

附記

「明治以後小田原劇場物語」は神奈川県立図書館発行の『神奈川史談』第七号(昭和四〇・三)に掲載したもので、大佛次郎氏が当時神奈川新聞に連載していた「小さい限」の中で大要を記してくれた。それから二十余年を経て今ではすっかり忘れられた観がある。この種の研究はほかにないので、ここにあらためて載せてもらうこととした。なお「小田原の桐座」は『神奈川史談』各論篇3、文化に載っているの、あわせて御覧願えれば幸いである。

「明治以後小田原劇場物語」は六回にわたり「小田原史談」に掲載されましたが第一回のみ再録しました。また、今回副題「桐座」を表記しました。(松島)

小田原の郷土史再発見

### 飯山家文書に見る

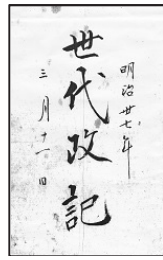
## 小田原の農民一家五代の物語

石井 啓文 ひろ ふみ

昨年三月、知人を介して鴨宮の飯山静枝家文書を調査して欲しいと依頼された。

冊子を含め九四件の文書を拝見したが、江戸時代の文書は三二件余、三分の一に相当する。

この内の二八件が土地売買関係で、金子貸借証文は僅か三件である。他家文書に比べて飯山家文書の特徴とも言えよう。



『世代政記』表紙

本稿は『世代政記』と題された小田原城主稲葉氏時代から書き始め、五代にわたり、家を守り田畑を増やしてきた記録である。解説は原文通りとしたが、句読点を付し、誤字訂正と送りかな及びルビを( )内に示し、□は判読不能文字である。

また、世代毎に若干の解説と増やした田畑反別も記した。「抑(そもそも)徳川の天下此相

模国足柄下郡鴨宮ハ、慶長年中、大久保七郎右衛門、拾壹万三千石を御普代(贖代)家として領す。万治貳年頃、田畑十地を入、畝歩を改めた。

上田 壹反歩二付米七斗九升  
中田 同 米六斗九升  
下田 同 米五斗九升  
下々田 同 米三斗八升

右本米メ石壹石二付口米三升加す。米三斗七升、是を壹俵として御年貢納る。残り□米ハ延口(のべくち)と申して一ち(いち)く六を掛け上納致すへき者也。延口を掛けハ一俵が四斗貳升九合貳夕なり。右米壹斗増し拾ヶ年すぎ打切ると、下より年次を□た者(もの)なり。

上畑壹反歩二付、永百廿五文。是も口永(くちえい)延口を掛、上納致すへき者なり。外ニ藁貳拾貳駄・糠三拾六俵・大縄百房・小縄五拾房・家並焚木出而、是仲間金五両、大豆拾三俵壹斗・小豆壹斗・餅米貳拾八俵、但し壹俵二付壹斗□也。堤坊(堤防)木出し、竹持役大名参勤登り下り、

公ケ衆酒匂川川越役・人足、御国役ハ内□金壹分出したもの、鮭川運上村方□□然る参勤換代(交代)ハ、登り下り箱根山ハ八里八丁、大磯ハ四里の町場を置き立、助郷の掛り夥しくする。其御雇と申して人足四百三拾人・御傳馬ハ十疋共日々に相立出、拂ハ助郷に入る者也。」

口永とは金納の本租の付加税で、銀又は錢で納めるもの。

万治二年(一六五九)は稲葉正則の時代。畝歩の改めは、同年小田原領足柄上下郡全域に行われた万治惣検地後の年貢改定である。

畝歩の改定のみならず、延口や延永の付加税、川越人足役や助郷役まで、過度な課役を強いられたことを言っているのである。

にもかかわらず、不平不満がましき言葉を全く記していないのは、領主に対する畏怖の念があったのであろう。

当時、起こったと伝承される下田隼人事件(越訴による処刑)の背景を窺わせる貴重な史料である。

「我先祖 飯山 清兵衛様

妻 ふな  
長女 おもん

一 屋敷 七畝拾歩

一 畑毛田 三畝壹歩

右都合壹反拾壹歩の地所を以て、伊豆ことバ(言葉)を以て農間茶賣をいたし丹情(丹精)し、此事宗太郎じいさんより我十才斗(ばかり)のとき承る。子供心ニても財物と思ひました。其内、来る日の話計(ばかり)を聴き、然るをさむしき家もいとなみくらしなさる、事、今、明治年間に至てハ此恩をほふ(報)じかた(難)きのみなり。見込、享保九年より宝暦六年迄三拾三ヶ年間、検約(儉約)奢りならざるが故、上田四反壹畝六歩、質地買入、此の代金三拾五両なり。今残りし十日の□是なり。反別屋敷者(ハ)五反壹畝拾四歩ニして、長女おもん上野町村より勘右衛門を簪二貫ひ、相續人と取極め、地所五反壹畝拾四歩を以て、飯山勘右衛門妻おもん江相讓る事、宝暦六年なり。」

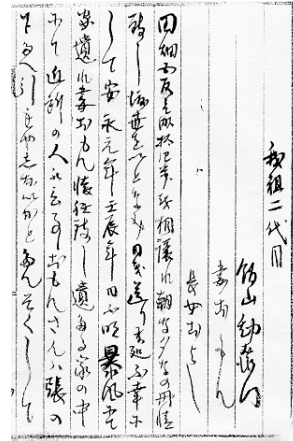
初代は、農間稼ぎにお茶の行商をして、上田四反余と屋敷も五反余にして一人娘の婿を上野村(静岡県駿東郡小山町上野)から迎えたという。

ただ、譲与年が宝暦六年(一七五六)とある。前述の万治二年からは九十七年後である。

清兵衛は総検地を知らない。おそらく聞かされた話で、それだけ年貢の過酷さが伝えられて



いたことが推定される。  
田畑 四反四畝七歩を譲与す。



「我祖二代目 飯山 勘右衛門

妻 おもん  
長女 およし

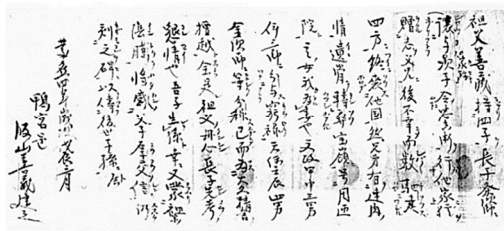
田畑(屋敷) 五反壹畝拾四歩を相譲(ら)れ、朝な夕なの丹情(丹精) 致し、渡世をいとなみ日を送り、其処ふ幸にして安永元年壬辰年、日ふ明(不明)、暴風にて家遺(遺)れ妻おもん懐妊致し、遺(遺)たる家の中に近所の人の云事、おもんさん八張の下たへ引れやしないか、とたんそく(嘆息)して評判有由だと云ふ事の云傳え、我母より承り候(そうろう)事。

勘右衛門様家再建、親里上野町の山の林、栗木切て八壹本宛(づ)かつき集め、晩に八足も洗はずに寝られたと云事なり。家悪(あし)ふても麓末(そまつ) 二相ならざる事、日(いわ) 夕上畑五畝拾八歩、此代金四両三分質地買入、誠二丹情(丹精) 八宝曆七年より寛政元年迄三拾三ヶ年間、此間家の再建、畑の五畝拾八歩買入、田畑

五反七畝式歩、長女およし一子なれハまつ(貧)しき家も農業もつは(専)らいとなみ(骨)がをれる。鬼だ(とほね)がをれる。たび(の)ことゆへ父の云ふ事腹に答江(へ)、二期の仕農ハ申すに及はず、牛になり馬に成り、丹情(丹精) したる事、老(おい)て後、嫁にかた(語)られけり。拙者七、八才の時分、此の事を母より承る。誠になけ(嘆)かハしき事。此の時分農米ハ前年、元右衛門様から借て来て、仕農をしたと云事。我父より承る。今ハ釘持元次郎又前年二戻り、およし江松本より入籍、飯山善蔵を智二貫(われ、田地を持(もち)参られ、中田五畝歩・中田三畝歩・上田壹反三畝拾四歩、都合式反壹畝拾四歩也。有したる田面共七反八畝拾六歩。是を以て飯山勘右衛門より飯山善蔵およしに、此相續取極メ、寛政元年に相譲り候事。」

して善蔵を婿に迎えている。  
「我祖三代目 飯山 善蔵  
妻 およし  
長男 飯山条次郎  
次男 久保田忠兵衛  
三男 飯山伊三郎  
四男 飯山金次郎  
飯山善蔵様、田畑七反八畝拾六歩を以て、寛政二年より渡世をいとなみ(日)に日を送る。然るを常に申さる、事ハ、おれハら、男の子をいくたり持ても獨りもくれないと云ハ尤と云事、又幸(さいわい) 二次男久保田忠兵衛と有るハ、子供の時、小田原老町田久保田茂右衛門方に縁二而貫ハれ、請人の後、然る處田地が出たからとうだと申したら、小判二拾壹枚よこしたと申す事、それで式反歩と東の前隠居のとぶ迄、旧ト六反九畝倍證文にて質取地二貫(わ)れ、其外メ高田反別壹町四反式畝拾九歩質入地買受、惣方メ高式町式反壹畝三歩と相成候處、寛政二年より文政五年迄三拾三ヶ年間。三男伊三郎二建物並地所道具五反壹畝壹歩を以て、文政七年甲申の二月分家候事。四男飯山金次郎、建物並二地所道具、田畑三反八畝拾三歩を以て天保三年壬辰二月分家の事、田畑八反九畝拾四歩掛る也。残り壹町三反

壹畝拾九歩を以て、飯山善蔵伴飯山条次郎並二おかね相續人に相譲る事、文政五年なり。」  
二代続けて一人娘に婿を迎えてきたが、三代目にして四人の男子に恵まれ、次男を養子に出すが、三、四男には九反近い土地を分けて分家させている。  
そして長男にも壹町三反壹畝拾九歩の田畑を譲り一町持になっている。当時、分家が許されているのは珍しい。  
これを書いたのは五代善蔵と推定できるが、彼はこの祖父善蔵を尊敬していたのであろう、善蔵の墓石に「祖宗ノ陰徳ヲ蒙リ、將父子厚交ノ信ヲ感シテ、仍チ之ヲ碑ニ刻ミテ、以テ後世ノ子孫ニ傳候」を漢文で刻している。



三代善蔵墓碑銘・写

「我祖四代目 飯山 条次郎

妻 おかね

長男 飯山善蔵

田畑壹町三反壹畝式拾壹歩を以て、文政五年より春夏秋冬、寒暑雨あられ、雪氷風風日なみを身を厭(いと)はず日々〜に月日を送る事、我ハ一子にして、久野山より茅茹(かやかり)にいかれても、あめ(飽)かし(菓子)の様なものを畑毛のふちで貰(も)る。てくうた事を爰に印ス。生長する迄□□りに手をあげられたる事、一切是なく親の恩、今以てほふ(報)しがた(難)し。我ハ一子にして農業油断なく、親の心を安んずる事を思ふ。下々田三反五畝拾五歩、金式拾六両質取地、屋敷式畝拾三歩、買入金三両三分、下々田九畝四歩質取金五両なり。メ高田畑反別壹町七反六畝拾八歩なり。是を以て父飯山条次郎、文政六年より安政四年迄三拾五年間加増、飯山善蔵妻おふさ相續極る。相讓る事、安政四年なり。」

「我祖五代目 飯山 善蔵

妻 おふさ

長男 飯山孝之助  
次男 飯山弥太郎  
三男 飯山兼三郎  
田畑壹町七反六畝拾六歩、安政五年よりつ、(豊)しんで引受、親の恩を送る事あたはず。されども農業耕作の根本、学(ん)でしらず。只時間をゆるかせに世ずして纒(わすか)拙者七、八才の時分、我ハよき月星の下に出たと、をりふし(折節)母が云ハれた。我も難有(ありがた)く思(う)た時に角別(格別)のふ仕合(不幸せ)も無き、誠に有難きこと。若しふ仕合等あり、金子も廻り兼候ときハ屋敷・竹木を賣り、それで間にあわさる時ハ、ふ用道具を賣り、それで又間にあわさる時ハ立物(建物)を賣り、地所壹歩たりとも賣ハよろしからず。を(こ)奢(り)大てき(敵、けんやく(儉約)よろし。上品(じょうしな)ふ用、道具ハ米代にて求めず、楽な金にて求(め)て宜し。若、朝太郎如きものなきふしもあらず。田地式反而已(のみ)をくれて地をくれず。相續人ハ弟妹によろし。若し、それなけれハ親戚血縁にて養子。六反九畝歩、バ以(倍)證文式拾壹両を四拾式両二なつた。夫(それ)より天保八年のき、ん(飢饉)に、壹両式分上金を出し、夫より拾三兩式分はね(匁)を加ふ金、おそめ親が預り置き、ふ陽氣にて村方小前(こまえ)より拾三兩二分を

取り戻しをわくちん(ママ)致し、其時、拙者が拾三兩式分□□出し証證と相成、五拾七兩の證と相なり候得共、書證に書損(じ)有五ヶ年相過候て書換(を)を願ひ來り、そめ(の)あに(兄)天野屋ハむかし(昔)の出入しなり。我も恐る、人なり。夫より明治六年四月廿日、向相談し故、中里五ツ所取締、矢作宇三郎、春光院奥の間二出張(ではり)、元之助と其夜、論を致し、また勝利を得、外河原嘉兵衛ト旧歩九畝四歩、是ハ元金五兩二て天保五年二質入、夫より文久年中二至て、三兩式分増金□□出しメて八兩式分なり。其後地所請戻しニ參る。高橋竹次郎宅地改正前、六畝拾歩先祖清兵衛様の古証文買入二付、是を見て引掛、理屈ハ道で無いけれども申募り、其俣ニ相成けり。深く問ハ、七郎左衛門より竹次郎江入る上河原四ト(反)か九畝四歩名田にする。若し後日、若い者出来た時に、馬わき荷車駄賃取ハよたのながし所なり。花あわせ少々過せハ大悪人恐るべし。碁・将棋・花池の類、農業のあわいにたのしんでよろし、義大夫すきならハ少々よろし、深入るし。大以世界に嫁の古着をかつき出しはやりを賣求め、是しんしよう(身上)のはめつ(破滅)なり。誠に悪か者なり。伯母さんの白むく(無垢)おんべら者(ハ)

しみのある者をしみをぬき、染めなを(直)し、是子供羽織にまとめてよし。是びんぼう(貧乏)を保つ大意なり。今御小田原様の□かを積りて見れハ、テンチヨウの恩ふう(封)じがた(難)し。誠に有難き次第なり。先祖代々の人々、貧祿(ひんろく)を以て田地買求められ、誠にこん難の場合□後代ニ至る迄、此家恩忘れずんバ、あるへからず

物計式町五反三畝廿五歩

安政年間 下家一ト棟

明治十六年 土藏一ト棟

安政五年より明治廿五年迄三拾五年間加増。右田地・立(建)物相讓る事、登記濟也。」

「もし、不幸があり金子廻り兼ね候ときは、屋敷の竹木を売、それでも間に合わなければ、不用な道具を売、まだ間に合わなければ建物を売つても、地



葺屋根葺替え後の飯山家母屋

所は一歩たりとも売ってはならない」と戒めている。こうした考えは多少の差はあれ当時の農民の多くが抱いていたことであろう。

また、義太夫等適度の娯楽を勧め、深入りしないよう戒め、「貧禄を以て田地を買い求めた」「先祖代々の家恩忘るべからず」と説き、遂に二町五反余の大百姓になっている。

後記

『世代世記』の全文を示しました。初代から五代まで一貫して田畑を増やし、いずれも生前の譲与を記している。

この記述は、飯山家文書六本の『田地買入控』文書に因るものであろう。特に「安政五年(一八五八)より明治廿五年(一八九二迄の写)」とする文書があり、本文書文末の「安政五年より明治廿五年迄三拾五年間加増」に一致する。

五代善蔵は、明治二十四年十二月に地所と建物を嫡子孝太郎に譲り、その三年後に『世代政記』を書き上げている。墓石から没年は、明治三十六年十月である。

『世代政記』とは、世代の政(まつりごと)の記録である。「政」とは「社会生活を正しく取り仕切る仕事」と『広辞苑』にある。頼山陽の著作に『日本政記』があるが、

事例としては多くはない。こうした言葉を善蔵は知っていたのであろう。

表紙文字に見えるように達筆である。また、本文でも述べたが、三代善蔵墓碑銘は漢文である。鴨宮村の一農民が「政記」をまとめ、漢文で祖父の事績を刻銘したことに驚かされる。

平易な漢文で、著名人や学者の漢文とは明らかに違う。善蔵の教養の高さが知れる。

初二代については、三代善蔵が祖父清兵衛から聞いた話と推察した。あるいは、数値等、文書が残されていたことも考えられる。それを五代善蔵が聞きまとめたのであろう。

特に、冒頭の稲葉正則の過重な年貢改定など、郷土史の上でも貴重な記述である。

今回、依頼されたま、に、浅学非才を顧みず解説と解説を試みたが、この史料は小田原農民の姿を知る上で大変貴重である。

是非、専門家の調査報告をお願いしたい。なお、昨年十一月、飯山家は母屋の葺き屋根を、岐阜の専門家に依頼して葺き替え、今春完成した。

岩瀬家とは斜向かいである。

小田原の貴重な文化財の二軒が間近に見られることは、地元歴史愛好家にとっても喜ばしい限りである。(おわり)

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝

もうずい分前の昔の旅を思い出して、懐かしくペンを進めるのは私にとつては何となく楽しいものである。それは私の所属している俳句会の全国大会で、仙台の奥座敷と言われる作並温泉のことである。私は四人のお仲間と共に上野より大宮のグリーン車での出発だった。作並温泉のホテルの一の坊では、全国から集まった大勢の句友達が懸命に作句に取り組んでいた。当日の句会が終わると名前は知っているが初対面の人が多いので、各地の人達から名物のお菓子の差し入れがありとても賑やかだった。

翌朝早く露天風呂に入り、冷たい風に肩まで浸かりさわやかな山の空気に触れた体が癒されるようだった。朝食後に二回目の句会があり、先生の講話のあと閉会となった。句友達とのお別れはそれぞれ散るようになって行った。もう一泊の予定の私達四人は、仙山線で仙台へ。駅前からハイヤーで先ず青葉城跡を見学。此所は東北大学の敷地だったそうでその広いのには驚いた。しばらくして松島に行くことになった。先ず伊達政宗の菩提寺瑞巖寺の立派な本堂に入り参拝した。宝物館も見学し松島のシンボル五大堂の赤い橋を渡って拝観した。おだやかな海、ああ此所が松島かと美しい風景に見とれてしまった。

行く春や、武将の像を飽かず見て

夕刻ホテルに着きゆつくりと休んだ。

翌朝起きるとすぐホテルの前より橋を渡り福浦島へ。すみきつた空のもと気持ちい、散歩だった。朝食のあと松島駅より東北本線で平泉まで乗るつもりが、停車が長いと聞き一旦降りてハイヤーで廻ることにした。溪谷美の素晴らしい巖美溪へ。昼食のあとは毛越寺へ。菖蒲の頃は見事な所だそう。達谷の窟にも行き岩面大仏は有名なのだそうだった。今日のメイン中尊寺は見所いっぱい、学生時代から聞いていた金色堂を目のあたりに見て感無量だった。日本の文化の重さがひしひしと感じられた。一関に戻りお茶を飲む時間があつた。仙台には夕刻おみやげを沢山持って新幹線に乗り帰途についた。杜の都仙台、日本三景の一つ島々が点在する松島の景勝地、心ゆくまで旅の素晴らしさを満喫出来て本当に幸せな三日間だったと思う。

遠桜日暮れてよりの旅疲れ

# 久所のむかし話

宮原 諄 二

前号の「久所(ぐそ)の始まり」を調べたときにお話を伺った高橋清さん(大正十四年生)は自治会長や生産組合長などを、また曾祖父の繁次郎さんは旧富水村の村会議員などを歴任し、久所の昔についてもっとも詳しく知っておられる最長老の一人です。興味深いお話はまだまだありました。もう少しご紹介したいと思います。

## 久所の初めのころ

伝え聞いた話では、昔、七人の武者がこの地に住み着いたのだそう。そのきっかけは小田原北條氏が豊臣秀吉に敗れ、北條氏が仕えていた多くの武者たちが職を失ったことにあるのではないかと思う。昔からこの地には椎野・高橋・和田・押田・飯田などの姓が伝わっているの、これらが武者の苗字ではなかったか。和田家は途絶えてしまい、今は残っていない。また久所にはセイザエモン屋敷、トミエモン屋敷、ワダ屋敷と呼ばれていた屋敷跡があったことを覚えている。祖母は文久三年(一八六二)生まれ、その

祖母の祖父は七左右衛門といい、過去帳によると享保十八年(一七三三)に亡くなっている。それ以前の過去帳はお寺が火事で焼けてしまい、残っていない。

高橋家の最初のご先祖は久所の地に入った最初の七人と伝えられている武者の一人であったようです。このお話と久所周辺の歴史や地名の調査から、「久所の始まり」は前号で述べたように、今から四百年ほど前に小田原北條氏が滅んだときに、現在の中井町の久所に縁の深い武者たちがこの地に入り、開拓して久所と名付けたとする地名転移説の可能性が高いようでした。

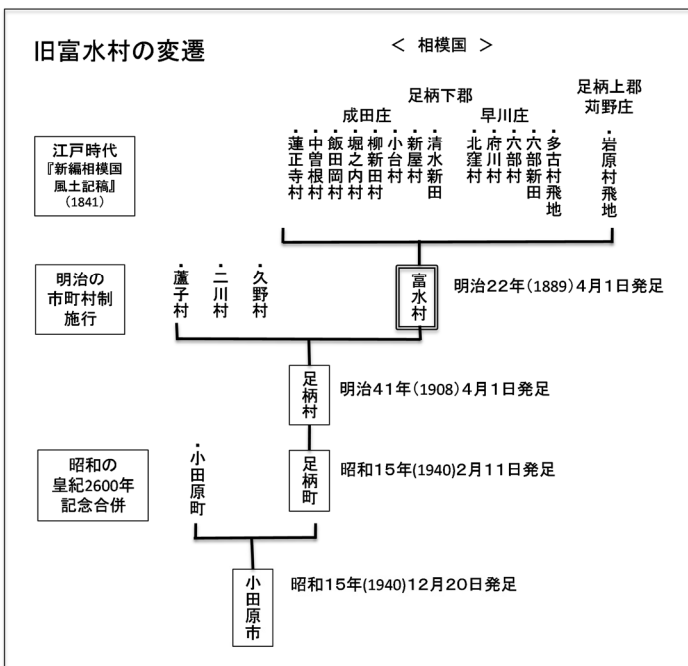
久所の旧家の菩提寺はほとんどが北ノ窪の陽雲寺なのですが、高橋家だけは久野の潮音寺(小田原市久野五二一)だそうです。お寺が遠かったため自宅敷地の中にも先祖代々のお墓があります。その潮音寺にあった過去帳が焼けてしまい、先をたどれないのではつきりわからないそうですが、最初のご先祖がやって来た時期は戦国時代の末期から江戸

時代初期頃なのでしょう。またお名前のお出た五つの姓は和田姓を除き現在でも久所には多くあり、特に椎野姓はとて多く自治会の全戸数の約二割にもなります。私の家の周囲の五軒はすべて「椎野さん」です。

## 昔の富水村のこと

江戸時代の小田原藩の頃から府川村があった。府川村は最初から府川と久所の二つの区域に分かれていた。明治になり、この地は足柄県府川村久所と言った。のちの小田原市自治会五十区の一が府川で、五十区二が久所だった。そののち、府川村は他の村と共に合併して富水村になった。さらに富水村・久野村・芦子村・二川村が合併して足柄村に、すぐに足柄町になった。昭和十五年、皇紀二千六百年の記念で、足柄町と小田原町が合併して小田原市になった。

所蔵されていた『神奈川縣足柄下郡 旧富水村地図』(昭和七年発行)を拝見しますと、いろいろと興味深いことが分かりました。この旧富水村とは明治二十二年(一八八九)四月一日付の市町村制の施行により、それまでの足柄下郡蓮正寺村・中曾根村・飯田岡村・堀之内村・柳新田村・小台村・新屋村・清水新田・北窪村・府川村・穴部村・穴部新田および多古村と足柄上郡岩原村の飛地が合併して発足した村です。これらの村は岩原村の飛び地を除き、いずれも江戸時代後期に書かれた『新編相模国風土記稿』



にも足柄下郡の村里としてすべ  
て記録されてきました。ただし  
狩川を境に東と西で分かれてい  
て、蓮正寺村から清水新田まで  
は成田庄に、また北窪村から穴  
部新田までは早川庄に属してい  
ました。

『小田原市史』などによれば、  
この富水村は蘆子村・二川村・  
久野村と合併して足柄村が発足  
する明治四十一年(一九〇八)四  
月一日まで存在しました。従っ  
て『旧富水村地図』は昭和七年  
発行ですが、江戸時代の状態が  
まだまだ色濃く残っている明治  
時代の初めが記録されていると  
思います。

『旧富水村地図』では旧村里  
の他の大字とは違って大字府川  
の地図は二つありました。現在  
の府川の地図と久所とは書かれ  
ていませんが明らかに現在の久  
所に該当する二枚の地図です。  
今はほとんど忘れ去られていま  
すが、久所の小字は十一ありま  
した。すなわち 水窪(みずくぼ)・  
堀籠(ほりかご)・眞角(まかど)・  
外貝戸(そとかいど)・美之輪(み  
のわ)・仲澤(なかざわ)・西之窪(に  
しのくぼ)・渡り澤(わたりさわ)・  
鹿塚(しかづか)・堀ヶ窪(ほりが  
くぼ)・羽ヶ尾(はねがお)です。  
『旧富水村地図』に久所の地  
名は出てきませんが、『新編相模  
国風土記稿』の府川村の項には

小字として久所が出てきていま  
すし、『旧富水村地図』の大字北  
ノ窪の地図には小字として久所  
前がありますから、この地図が  
できる前から久所は地名として  
存在していたことはたしかです。  
現在の国土地理院発行の地図に  
久所の地名が明記されているこ  
とはそれを物語っています。し  
かし久所という地名は旧富水村  
が成立した明治二十二年以降は  
行政上では抹消されたようです。

今はない天神さまのこと

現在の久所公民館の場所は昔  
は山だった。おばあさんから聞い  
た話では、明治の末までそこに  
は天神さまがあった。久所の人  
たちは昔からその天神さまと諏  
訪神社の二つを鎮守としていた  
そうだ。天神さまは明治の一町  
村一神社政策により現在の諏  
訪神社に合祀され、土地もまと  
められた。以前土地台帳を調べ  
たことがあるのだが、天神さま  
のあった土地は明治の終わり頃、  
明治四十一年か四十二年頃と  
思うのだが、諏訪神社の土地と  
して登記されていた。諏訪神社  
の下社などもその時に合祀され  
てなくなったのだろう。現在の府  
川一番地には神社がなくても  
諏訪神社の土地であるのはその  
ような経緯があったためだ。  
つい数年前に老朽化で取り壊

された諏訪神社の神楽殿の建物  
は天神さまのお社の一部だった。  
「天満宮」と書かれた額が諏訪  
神社の中の奥宮にまだ置かれて  
いるはずだ。額には寄贈した「幸  
次郎」の名前があったと思う。ま  
た天神さまが取り壊されると  
きに、社の中にあっ

た小さな奥宮は子  
安の社として北ノ  
窪の陽雲寺に引き  
取られた。しかし  
大正十二年の関東  
大震災で北ノ窪天  
神社が倒壊したあ  
と、再建したときに  
北ノ窪天神社に移  
された。今でも奥  
宮として社の中に  
あるのではないか。  
天神さまの跡地に

は関東大震災のあ  
とに養蚕のための久  
所の共同作業所が  
作られた。私の家の  
一階の天井が高いの  
は二階で蚕を飼って  
いたためだ。その共  
同作業所の隣には  
事務所の建物があっ  
て、久所の人たちが  
集まる場所、青年  
会所として使われ  
た。四畳半と八畳  
間くらいの広さだっ

【明治時代】:久所の天神社 (旧富水村地図)



【現在】:久所公民館 (国土地理院地図)



た。昭和三十年代になって、明  
治製菓の工場が小田原市栢山  
に作られることになり、その造  
成に土が必要になって山を削り  
低くして今の久所公民館の土地  
が作られた。公民館の脇の切り  
通しの道もその時に造られた。

江戸時代の久所には西光寺と天神社の一寺一社があった。字天神下にあった西光寺は後に廃寺となり号を移して、元禄の大地震の死者を弔うために小田原谷津の慈眼寺が建立された。天神社は明治末の神社合祀政策により取り壊され、跡地には養蚕の共同作業所と事務所が建てられた。事務所は青年会所としても使われていた。現在の公民館は天神社があった小山を昭和30年代に削り取った平地に建てられ、脇の切り通しの道はその時に新しく作られた。

明治末の神社合祀政策で取り壊された  
久所の「天満宮」の額（諏訪神社に保管）



表「天満宮」



裏「慶応二年寅年正月  
願主当邑 椎野幸治良・・・」

久所に神社があったとは知りませんでした。神社合祀政策に關しては明治初年の太政官布告と明治三十九年（一九〇六）の内務省訓令の二つがあります。特に後者の内務省訓令により日本の神社の数は激減し、鎮守の森もまた消滅しました。全国二十万社のうち七万社が取り壊されたといえます。これによって鎮守の森が消え去り、地域に根ざした多くの文化や歴史もまた消え去りました。南方熊楠がこれに反対運動を起こしたことはよく知られています。神社合祀が行われる以前はそれぞれの集落にはさまざまな神さまを祀っていた複数の神社があったのでしよう。久所もまた例外ではなかったようです。

さらに明治から昭和にわたる神道国家管理時代には、「宮」号は祭神が皇族のため勅許が必要となり、各地の天満宮も天神社・天満神社と改称させられました。久所の天満宮はどうであったのか。

『旧富水村地図』には現在の久所公民館の場所に天満宮がはつきりと描かれています。当時は小高い山の上にあります。

この土地を法務局で調べたところ、明治四三年と大正元年の二回に分けて諏訪神社に移転されていきました。天満宮は神社合祀政策が出たあと、改称させられる前に取り壊されたようです。お話のように諏訪神社には数年前まで鳥居の奥に朽ち果てた小さな舞台のような建物がたしかにありました。それが昔の天神さまの神楽殿であったとは知りませんでした。天満宮と書かれた額は、平成二十六年三月の諏訪神社大祭の前日に社の中に入る機会があり確認したところ、たしかに諏訪神社の中の奥宮の裏側の壁に立てかけてありました。額の裏側には『慶応二年寅年正月 願主当邑 椎野幸治良・・・』と書かれてありました。「・・・」は額の補強のために裏面に打ち付けられた木材により判読できなかった部分です。慶応二年ですから明治維新になる

直前の江戸時代末期であり、當邑とは久所のことを示しているのでしょう。この額の隣に欄間のような大きな彫刻がありました。高橋さんによるとこれも天満宮の社の一部とのことでした。北ノ窪天神社に移されたという久所の天満宮の奥宮については、まだ確認していません。

### 諏訪神社のこと

府川の名主であった稲子家の先祖は信州から移ってきた武田信玄の一党であって、諏訪神社の創建はそのご先祖が関係しているといわれている。府川の中にあつて稲子さんだけは久野にある総世寺の檀家だ。稲子家のもとと久野に住んでいて、久野から府川に移ってきたのではない。稲子家は諏訪神社にまつられているご神体を保管して、お祭りの時に神社に持っていくようにして、神主のような立場だった。

諏訪神社の天井絵は今はずくなつてとも見にくいですが、昔は鮮やかな絵だった。江戸時代に狩野派の小田原の絵師が描いたと聞いている。あるとき天井絵に描かれている龍が降りてきたという龍の形をした跡が床の上に見つかつて大騒ぎになったことがある。その時に撮った写真を見ることがあるが、たぶん中に吹

き込まれた落ち葉がナメクジが動いた跡ではないかと思う。

久所と府川の共通の鎮守であるこの諏訪神社は、『西さがみの地名』（田代道彌著）によれば、県立おだわら諏訪の原公園の中にある現在の上社の「本宮」の他に、昔は山を下ったところに「前宮」（細窪）があり、また下社の「春宮」（相洋高校グラウンド）および「秋宮」（清水新田）の四つがあつたようです。この四つの宮からなる形式は長野県にある諏訪大社と同じです。『日本歴史大事典』によれば、日本書紀にすでに記録があるという諏訪大社については「源頼朝が拳兵時より守護を受けたことで武家が武神として信仰、全国に勧請（かんじょう）された」とあります。勧請とは「神仏の分身、分霊を他の土地に移してまつること」の意であり、その結果、全国各地には一万とも言われる多数の諏訪神社が存在するようになりました。この地の諏訪神社が創建されたのもこの出来事があつた後でしょう。『小田原の神社巡り』（神社探訪会）によれば、市内には一九三社の神社があるようですが、その中で諏訪神社はこれの社だけです。

古くから軍（いくさ）神として崇められていた諏訪神社を創建

したのは、やはり武者が関係していたのでしよう。諏訪神社の鳥居脇にある由来記によれば、『武田信玄・勝頼に仕えていた新川光輝という武士が武田家滅亡後に里武士となって当地に住みつき諏訪明神を祀った』と記されています。武田家滅亡は武田勝頼が自刃した天正十年(一五八二)とされていますからまだ小田原北條氏の時代です。久所に最初にやってきたという「七人の武者」の時期もやはりその頃であって、諏訪神社の創建に係っていたのでしうか。

久所のもう一人の長老である椎野寿雄さん(昭和四年生)のお話によれば、

現在の諏訪神社の社は昭和の初め頃に建てられた。ひいおばあさんからは、その前の社は大工さんだったひいおばあさんの実家が建てたと聞いている。ひいおばあさんは昭和十五年に九十二歳で亡くなっている。

とのこと。そうするとひいおばあさんは天保九年(一八三八)頃に生まれたこととなります。従って諏訪神社は近年少なくとも明治の初めと関東大震災で崩壊したあとの二度にわたって建て直されていることとなります。諏訪神社の鳥居脇にある由来記によれば、造営の記録は天明二

年(一七八二)および大正十五年(一九二五)となっていました。天井絵は社が建て直されるたびに江戸時代からの絵をそのまま用いてきたのでしう。私が久所に引越してきた頃はくつきりで見えていたのですが、平成二十六年三月の諏訪神社大祭の時に見たときはほとんど消えかかっています。

#### 今はない西光寺のこと

天神さま(天満宮)の隣には西光寺(さいこうじ)というお寺があった。このお寺は小田原の谷津に移り慈眼寺(じげんじ)になった。慈眼寺は「投げ込み寺」と言われていた。

久所にお寺があったとは知りませんでした。調べて見ますと、お話に出た慈眼寺は小田原市城山に現存する黄檗宗の寺です。寺の縁起によると『元禄十六年(一七〇三)の大地震での被災者を追福するため、大久保加賀守忠増が一寺建立を企図、久野総世寺十八世實全と謀って、廢寺となっていた府川村天神下にあった曹洞宗西光寺を引寺し、僧惠極を中興開山に迎えて黄檗宗慈眼寺と号し、正徳五年(一七一五)に堂宇を建立した』とあります。この記述は『新編相模国風土記稿』の谷津村の慈眼寺の項

の説明を引用していました。「投げ込み寺」は吉原の遊女で名高い東京の南千住の淨閑寺(じょうかんじ)がありますが、慈眼寺も身寄りのない地震の死者を葬ったのでそのように呼ばれていたのではしう。

一方同じ『新編相模国風土記稿』の府川村の西光寺跡の項には慈眼寺との関係が書かれていて、『西光寺跡は府川村の字天神下にあつて、その西光寺は府川村にある正応寺の開山が慶長十五年(一六一〇)に隱棲の場として建て、元和年間(一六一五〜一六二四)に亡くなった後は無住となっていたところ、総世寺の第十八世實全が万治三年(一六六〇)に小田原谷津村に号を移して寺を建て慈眼寺となつた』とあります。新たに寺を建てることは幕府の御法度であったために、廢寺となつた西光寺を利用したのでしう。西光寺のあつた字天神下とは、昔の天神さまのあつた小山の下の意であり、現在の久所公民館の北西側に当たるのでしう。

慈眼寺建立の年代が『新編相模国風土記稿』の二つの記述で五十年ほど違っています。元禄の大地震は元禄十六年に実際にあつた話なので府川村の項よりは谷津村の項に書かれた年代の方が正しいのでしう。『新編

相模国風土記稿』は昌平坂学問所の幕府の役人が現地調査せずに地元の名主などから提出させた資料に基づく場合も多かったようですので、矛盾したり誤つた記述もそのまま載せてしまう場合もあつたのだらうと思いません。

なお久所にあつたという西光寺は十数年ほど存在しただけであり、その敷地面積は四畝四歩(およそ百二十五坪)と記されているので、お墓がある広いお寺という現在のお寺のイメージよりはそのお坊さん一人だけの小さな隱居所のようなものであつたのでしう。

#### ・・・おしまい

新しく住むようになったよそ者にとつては、その地に代々伝わっているむかし話も知らず、幼い頃の遊び慣れた場所もなく、周りの景色も単なる風景でありました。しかし古くからお住まいになつている方々の話を聴き、地域のことを知っていくと、それまで気にも留めなかつた身近な風景や周囲の人たちとの会話が急に新たな意味を持ち始め、命を与えられたように輝き始めてきました。いつものように道を歩いていても昔の風景が目の前に浮かぶようになりました。不思議なことです。

## 片岡日記 昭和編 (二)

片岡 永左衛門

昭和二年三月

一日 晴

二日 晴

登記ノ件ニテ松田ニ出張、四時帰宅。

三日 晴

内山監査役、藤永支配人来店。

四日 晴

午后辻村清之助及尾崎ニ立寄、帰宅。

五日 晴 雨

午后より岡田新客二行、六時帰宅。

六日 晴

親一帰省、八時帰京。

七日 晴

今朝は霜繁く風寒し。

ねき畑のねさいや青く今朝はまた

春にしぐれぬ霜そおきける

八日 晴

昨夕強震ありしに今朝の新聞を見れば\*二丹地方大震、大坂地方も被害ある様子。八木頼蔵に見舞状出す。

\*二丹地方大震 三月七日、京都府の丹波・丹

後地方で発生したM7.3の大地震

九日 雨

昨夜より雨降、おとも甚た高し、朝来風雨となる。

天にます魔神のはなつ銀の矢か

おほしくもふる雨の音かな

関の西なる震災をかなしみて  
大震に家なき人やいかならむ

吹風さむく雨のふりきぬ

十日 晴 風

夜二入り\*震災慰問品ニ就ての廻状来る。隣家に廻達に夜中なれば細君下女と持参す。其留守中に藤田分区長の細君慰問品の取集に來り廻状遅延の言訳をなす。凡壺戸壺円より式拾錢位迄との事にて、夜中奔走の礼と共に壺円を頼む。戸を閉て鍵を掛れば又来る人あり。開れば\*近藤外巻氏久々にて過日の礼に來り、十時頃に帰る。今夜は珍敷人の来る晩なり。

床の間の梅の面白さに

ともし火の匂ふもゆかし花瓶の

うすくれなひに咲る梅か枝

\*震災慰問品 小田原町では、募金の三千円と町の出金七百元を町長等が被災地に持参した。(横浜貿易新報)

\*近藤外巻 (一八八三—一九六八) 小田原唐人町で医院を開き、益田孝の主治医も務めた。

十一日 晴

十二日 晴 雨

十三日

昨日よりの雨は今朝より風雨となり、箱根はまた雪。

十四日 雨

昨日當地の雨は大磯辺より以西は雪にて前回より大雪、東京も雪、電話も雪の被害にて東は各地とも夕刻迄不通。

細君昨日横濱行の筈なりし二日延引、今日行き夜に入り帰宅。

十五日 晴

十六日 曇

本店二行き五時帰宅。

十七日 晴

岡田小三太君埋骨ト三七日佛事ニ同家ニ至る。町議川田守三も來會、全氏曰ク、町長後任問題ニ付、昨年来懸案は憲政派平川、山田、政友ノ瀬戸等は當地人物の拂底より有給を主張し、何レかノ旧郡長ニテ今程ヶ谷(保土ヶ谷)町長の吉田淳一二交渉し暗諾を得たるも、一部議員ハ反對し名譽町長ヲ主張し、候補として現町長今井廣之助、弁護士中田寿一郎、余ト三人を挙たるに、是に對し今井ハ辞任を申出、既二決定する。今井を再撰ハ不可、中田は八方美人の嫌(きらい)あり、片岡氏ニ至テハ承諾の見込なく、見込なきを挙るも不可トの事ニテ、目下ハ吉田ト前当郡長なりし吉野勝、中田ノ三人中より縣知事に撰拔を任するとの事になるへし。君ニ就ハ何も反對の理由なく且承諾すれば各派共ニ折合へく是非にと勧誘せられしも、謝絶したれば是にて全く拙者は除外となるへし。(つづく)



## 宮之前的山田呉服店(下)

話し手 山田 彰夫さん

木綿、三纈のこと

あんた方、木綿は昔から日本人は使ってたと思ってるだろう。木綿はね、江戸時代になって普及した。それまでっていうのは庶民は一口で麻っていうけど、本当の麻じゃないんだよ。例えば柳の枝だとか、葛の茎だとか、家の周りに雑草として生えているやつから繊維を採っていたのよ。

草木から繊維を採るのは時期があるんです。冬の枯れてる時じや駄目なんだ。春になってそういう植物が水をクックと吸い出す時じゃなきゃあ。それから糸を取り出す時には、さんざん麻を水に浸けておいて水分をタツプリ吸わせてから皮を剥いでね、それで包丁みたいなやつで刮(こそ)いで繊維を採るんだよ。

私も柳や葛から自分で繊維を採りだしてみたけれども、それで染めるのも、昔は友禅というテクニクがなかったから(それはずーっと江戸時代になってから友禅のテクニクが出て、糊おきというものが出てきて、それで友禅になったんだよ)、それまでは三纈(けち)って言ってね、絞纈、挟纈、

臈纈って言うんだ。

絞纈っていうのは絞り染め、挟纈っていうのは布を板で挟んで両側が出たところが波形の絞りに出てくるやつ、それから臈纈っていうのはろうけつ染めのことです。

それからあとは、全部手で絵を描くかどうかなんだ。そういうやり方で、辻が花の絞り染めっていうのは大名なんかを着てたつてのが今でも残っている。

友禅の染めが普及してからというものは色が多彩に表現出来るもんですから、辻が花の絞り染めは廃れていた。それが今から十五年か、二十年経ったかな、京都の小倉建亮っていう人が弟子と一緒に、ああやったんじゃねえかと思んだ。さんざん試行錯誤して、復元をしたんだ。

木綿の種は室町時代に日本へ入って来てるんですよ。ところが室町の末期から、戦国時代っていうのは百姓は輜重兵(しちようへい)みたいに武器や食糧の搬送に狩り出されていたから木綿の栽培が出来なかつた。木綿というのは、肥料と水やりが大変忙しい植物だよ。

だから徳川時代の平和の時代になって初めて全国的に栽培が始まった。ただし、南方植物ですから、関東でも真岡あたりが北限ですよ。松阪に松阪木綿、この辺には秦野木綿がある。

今の染料は殆ど化学染料なんだけど、それが出来てきたのが大正末期から昭和のはじめごろからじゃないかと思う。それ以前は全部植物染料、草木染め。あとは鉋物だとか、そういうものの煮出したり、場合によるとコチニールなんていうサボテンにくつつく貝殻虫を潰したやつだ。それは赤い色が出るんだよ。そういう天然染料なんですよ。

今の染料っていうのは色素で合成したもんで、材料が殆ど石油から造っているから、色がピシシャーツと出るんです。その代わり柔らかな中間色あまり出ない。植物染料の草木染めは、柔らかい日本人の心にあつたような色が出るけれども、日光には弱いんです。

自前の頒布会

戦後になってだんだん着物の需要が出てきて、呉服屋が販売会、いわゆる展示会をやるようになって。それを例えば小田原だと、箱根の温泉旅館の座敷を借りたりしてやりましたよ。そうすると、全館休館にする代わりに営業補償としての賃貸料、お客さんに飯を食

わせる、入湯料を払うというようなこともあつて、赤字になっちゃうから販売会やらない方がいいわけだ。そういうわけで、商品の売価にそういう経費を上乗せをして販売会をやっていた。

で、さっき私が申したように、余計な儲けをしちゃいけない、呉服屋なら呉服屋の義務・責任を全うせよというのが私に染みついてる教えでしたから、そういうところに私は参加することもなかつたし、だけでも売上をどうやったら上げられるか、ということを考えて。

当時、自分の店で販売会をやっていたのが南町の片野さん。それで私が片野さんの亡くなった親父さんに、「おじさん、どういう飾り付けをしてるんですか。その準備をする時に手伝いに行くから俺にそのやり方を教えてくれませんか」と言ったら、「おお、いいよ」と承知してくれた。片野さんでは店だけじゃなくて、住まいの家財道具も全て片づけて、部屋に全部呉服物を展示してたんだよ。こういうやり方をやるのかと、それで私はそれをすぐに自分の販売会をやったら、片野さん以上の販売が出来ちゃった。

富士だつて広い裾野あつてのと

春・秋の年二回大きく展示販売

会を開催し、年ふた山の大きな売り上げを作っていました。

こうして三年程たった頃、年間の売上げを維持しながら売上げの山を平準化することは出来ないだろうかと思えるようになった。

こういう思いを持っていた時、新聞の三越デパートの広告に「帯の会」という単品販売の案内を見て、「これだー」と思い、小紋や帯の優品の販売会をした。

更に、この単品販売を進化させて染色作家の作品展を催したらどうだろうかと考えたんですよ。呉服業界ではデパートも含め誰も開催したことがなかった。

まず最初に選んだのは立岡茂雄先生。この人の作品は染織技術も優れていたし、どの作品も見るとだれにでも晴々と明るい気持ちにさせてくれる作品だった。

そこで、問屋様にこの先生の作品展をしてみたいので商品を何十点かためてくれないかと交渉し、開催にこぎつけた。

初日、先生は展示会場をぐるっと見て、展示の仕方については納得されたが、作品の評価が低すぎると怒られた。つまり売値が安すぎると云うんだよ。

そこで、「私は先生の作品が優れているからこそ先生の作品だけの展示販売会を考えたのです。そして大勢の方に御覧いただき、又今回お買い求められなくても

いつか先生の品を買いたいと思っただけでいいようにと考えました。」先生、富士山だってあれだけの高さになるには広大な裾野あってではありませんか」と申し上げたら、先生は「済まなかった、僕が間違っていた。僕の作品をそこまで考えてくださっていたのか、ありがとう」と謝られた。それから先生の生涯を通して呢懇のお付き合いをさせていただいたよ。

そのあと辻ヶ花の絞り染めを解明復元した小倉建亮展とか藤本弥三郎の微細な小紋展、人間国宝の中村勇次郎の江戸小紋展とかいろいろ開いた。

日本の伝統衣装は、ただの着物というだけではなく工芸美術品という面もあるんだね。着物には造る人、仲介する人(売る人)、使う人、それぞれの思いがあって日本人の心の有り様・感性のおおもとをつくっている。呉服屋の誇りだ。

しかし、「きもの業界」も往事の四分の一になる有様で、情けなく苦しんでいます。また、私も年を取りました。

うちのお客さん

うちは、本家が綱元をしてたから片浦のお客さんが多かった。それと箱根のお客さんも多かった。

例えば湯本で言う吉池、福住、

一の湯、塔ノ沢では塔福、宮の下の奈良屋だとか、葛屋、強羅の環翠楼、芦乃湯の松坂屋、紀伊国屋、そういう一流のところの浴衣や丹前はほとんどうちが納めていたんだよ。

富士屋ホテルさんとはお客様が外人さんだったでしょ。それで今でも私覚えてますけどね、ドイツ人でオハルさんという方がいたんだよ。亡くなるまでその方はうちに買い物に来てくれましたね。

私のうちでは、芸者の着物は一切扱わなかった。何故かというとうちなんか素人のお客さんが相手でしょ。そうすると、うちのお祖父さんなんかがそういう仕入れをする、所謂玄人向きには粋さがない、芸者向きではないわけ。今度は一般のお客さんには粋過ぎちゃって駄目なんだよ。そういう関係で一切芸者の座敷着は扱いませんでした。

ただし、芸者が例えば芝居を見に行くとかなんとか、座敷着じゃなくしておしゃれに使うには、一般のお客さんと同じように販売していた。

料亭の女将もウチに買い物に来た。ああいう料亭の女将さんていうのは、決して晴れ晴れしいのを着なかつた。お客より派手に見えるじゃないから、渋いものを着てたわけよ。だから大松の女将

さんなんか亡くなるまでウチで買い物してくれていたよ、

松永のお爺さんの話をしようか

それじゃあ、松永のお爺さんの話をしようか。松永安左エ門さんが小田原に来た時、小田原はどの呉服屋がいいんだと言われて秋葉山の先代山主がうちを紹介してくれて、それからずーっとお爺さん、お婆さん(奥さん)の着物の世話をしましたよ。そういうことで私は十年間、陰日向なくお付き合いしてました。

松永のお爺さんという人は、ありゃあ、なかなか厳しい人だね。例えばほうほうの会社のトップクラスの人がよく来てたよ。なかには爺さんの嫌いな人があるわけだ。そういう人が来て、(今でも隣に藪田和子っていうんだけど)「女中の和ちゃんか」「どちら様ですか」って。「私はこれこれこういうもんだ」と名刺を出すわけだね。そうするとお爺さんに取次ぐでしょ。と爺さんそれを見てね、この野郎と思う人には、「今日は松永はおらんぞ、おらんと云え」とデツカイ声で言うんだよ。それでそれが全部来訪者に筒抜けです。しょうがないもんで女中の和ちゃんが、「今日は主人は他出しておりますと」、こういうわけだ。そういう大会社の社長が肩を落としてしおしお帰るのを私

は何人か見えます。

松永のお爺さんはああいう方だったけど、自分の生活は絶対に贅沢はしなかった。会社に行く時は洋服で通ってたのよ。ところが帰ってくると全部和服なんです。その和服も、ああいう方だから結城や大島、いい反物を貰うんだ。それで捲えればいいんだけど、決してこしらえなかつた。全部出入りの人にやつちやつた。

それで自分の着物はツギの上のツギをあてて、三重、四重のツギをあてて、仕立て替えをして着てた。それを私のところで面倒見ました。

お爺さんは客(けち)だったからではないんだね。物は使える間はどこも使ってやらなくてはかわいそうだ、又、精魂込めて作った人にも申し訳ないと思つていられたからだよ。

いよいよもうこりや駄目だ、どうにもなんねえという時に和ちゃんにね、「おじいさんによ。もうどうしよもねえから、こりや駄目だ寿命だと言ってくれ。新しく新調するように言ってくれよ」山田さん、自分で言つてよ」と言うから私、「お爺さん、とにかくもうこれは始末におえませぬ。そしたら爺さん、「君が言うんならそうだから。それじゃ、新しく一丁作ろうじゃないか」と言うんだよ。

「それじゃ、お爺さん、いつお

暇ですか」「何でだ」「お爺さんの暇な時に何点か持つてきますから選んでください」「そんな必要はない。君がわしにええな、と思ふもんでいいから捲えてこい」と、こういうわけだ。

それで、しようがないからと思ひ、私がこれならお爺さん気に入つてくれんじやねえかなと思ふものを作つたんだ。すると、「どれどれ、どんなのが出来た? おお、これはええなあ」。

「僕が一服点てよう」

「どうして君、これが僕にええと思つたんだ」「お爺さんは天下のお茶人です。華やかなものはお嫌いだから、といつて質実一方のものではお茶人としての趣きがないと思ひます。それでこういうものを選んで持つてきました」「おお、そうか。じゃ、今日はな、僕が一服点てるから、飲んでいつてくれ」と、こういうわけだ。

ところが、「お爺さん、私は天下のお茶人のお茶をいただく作法を知りませんから結構です」と言つたら、「なあに、君ね。茶なんてのは飲んでから、うまきやうめえと言ふがいいし、苦きや苦いと云えばいいんだ」「そうですか、それじやいただきます」。

そのとき出されたのが「蕎麦茶碗」。あのお爺さん、春と秋に園遊会をやつて自分の収集した美術品

を皆さんにお目にかけてたでしよ。その時にケースにちゃんと鍵をかけて展示する茶碗。それでお茶を点てて下さつたんです。

「お爺さん、これはいつも大事にケースの中に鍵かけてる茶碗じやないですか」「何、君な。茶碗なんていうのは国宝であろうが重文であろうが、茶碗は茶碗で、時には使つてやらなきやいけないんだよ」とおっしゃつてね、それでやつてくれたよ。

お爺さんは自分が嬉しかったことは「俺もこれほど嬉しいよ」と伝えようとしたりですね。何ていうのかな、それこそ人を遇する、もてなしの極意だと思つたよ。いい勉強をさせていただいた。お爺さんはそういう人ですよ。ありがたいことです。

老樗荘の金庫の中

松永のお爺さんは慶応病院で亡くなった。小田原に帰りたい帰りたいと言つたから、小田原に連れてきて、葬式はやらなかつた。

お婆さん(奥さん)の時も葬式はやらなかつた。というのにはね、「うちのばあは世間並みの葬式なんかやつたつて喜ばない。お茶一服点ててな、枕元に線香一本立てりゃいいんだ」、そうお爺さん言つてるよつて、こういうわけだ。それで悔みに来た人にはみんな枕元へお線香立てておしまい

で、次の日に小田原の火葬場で火葬しちゃつて、お婆さんの遺骨を分けてた。

奥さんは一子(かずこ)つていうんだけど、埼玉のお寺と壱岐の島へ持つて行くお骨と、二つに分けて置いといたんだ。だけど、壱岐の島にはちよつくら行かれないもんだから、金庫の中にお骨が入つてたんだよ。

何故私を知つてゐるかというとお婆さんの葬式の後にお爺さんの着物の勘定を貰いに行つたんだよ。そしたら女中の和ちゃんかね、「山田さん、いやだよ。金庫の中にはお骨が入つちやつてつから、怖くて開けらんない」つて、こういうわけだ。「じゃあ、金庫の番号を言つてよ。俺が開けてお金を出したら払つてくれるか」。それで番号を聞いて開けてみた。

そしたら本当にね、白い瓶(かめ)のまんま。箱に入つてもなく、風呂敷に包んであるわけでもなく、瓶のまんま金庫に入つていた。それで私は知つてるわけだ。金庫は老樗荘の階段の下に今でもある。あの金庫の中にお骨が入つていたんだよ。

「爪を伸ばした値段」の話

お爺さんが美術館(松永記念館)を建てるときに「釈迦金棺出現図」を買い取つた。国宝の大きなやつ。

あれは当時の譲り渡し価格が三千万だったが、お爺さんはそのとき三千万の金がなかったんだよ。

それで、東京・京都・名古屋などの出入りの骨董屋を集めて「君たちから買ったものだが、買い戻してくれ」と、こうやったんだ。そうしたら骨董屋の連中が「弱っちゃった、弱っちゃった」って言うってたところへ、私がちよつと用があつて行つた。

「さつきからあんた方、弱っちゃった、弱っちゃったって盛んに言ってるけど、何弱ってるんですか」って言ったら、「いやあ、実はこれこれ、買ったものを買い戻せと言ってるんだ」「買い戻せば

いいじゃないですか」「実はね、山田君。松永のお爺さんは、私

これをいくらで買ってくれっていうと、値切ったことがない。全部言い値で買ってもらつていた。そういうことで私たちもつい爪を伸ばした金額で売っている。売った値段で買い取ると、今度転売するときに商売にならない」「そりゃあ、自業自得じゃないですか」と言つて大笑いしたことがあります。

記念館のところに蔵があつて、あの蔵にだいたい入つてたんだよ。それで私はあの絵が見たいなと思うと、女中の和ちゃんに「鍵貸してくれ」と言つて、鍵を開け

て絵を勝手に見ることが出来ていた。

私は牧谿(もつけい)が好きでね。韋駄天と猿の三幅対の絵(伝牧谿、重美「韋駄天・猿猴図」、現在福岡市美術館蔵)があつたんだよ。「釈迦金棺出現図」(現在京都国立博物館蔵)なんていうものよりも好きだった。あれは本当の水墨画で、いい絵だったなあ。

松永のお爺さん、普段はよく大広間の畳を敷いた縁側に籐椅子に座られて、英字新聞読んでられたよ。

みなさんにはおつかない親父つていう印象が強いんだが、あのお爺さんがニコツとすると、おお、

何とも言えない好々爺かと思うくらいのいい笑顔でしたよ。くやしいけれど私も年を取りましてね。

耳遠く会話にのれず子犬抱く  
影

併号?そんなもの持つてないよ。  
(平成二十六年十月二十五日  
聞き書き 青木良二)

#### お詫びと訂正

先号の「宮前の山田呉服店(上)」にて山田様のお名前を「影夫さん」と記しましたが正しくは「彰夫さん」です。山田様に大変ご迷惑をかけたことをお詫びし訂正します。  
(松島記)

## 小田原大秘録(巻一から巻三までの読み下し文)

### 第九回 巻三の二

#### 鳥居 泰一郎

小田原家中の馬術の名人篠崎大助は彼に劣らない上手、旗本の日向東蔵・尾張の福田勤平に出会う。

此の時分、篠崎大助幸成と言う者あつて馬術に妙を得たり。馬において古の小栗というともおさおさ劣るまじき名人にて、古今の上手なり。然るに江戸愛宕下に於いて時々借馬を乗りて楽しみけるが、六十六部ここに來たつて篠崎の乗りけるを感にたえて見

物し居たりけるが、後に篠崎に向かい申しけるは「誠に君は御名人なり。私も馬は殊の外数奇にて名人の乗る時は乗馬のはら大地をすると聞きしが、今君の乗り給うを見るに乗り出されて候て、中ば過ぎまでは腹をすり候なり。今少し御修行あらば馬場の末までもすり申すべし。兎角、御修行第一なり」とて別れたり。

或時、又御旗本衆五六人來つて乗りけるが、其の中に老人、勝れて上手なり。篠崎、此の乗りけるを見て思わず一声かけたりしが、彼の旗本も面白き事と思ひけん、篠崎に向かい一鞍召さるべしといろいろ進めければ、篠崎打ち乗つて延びを取り、□に至つて鎧を七五三にあおつて、馬場の角にて一足にとどめたり。其の時、旗本も感に絶え、是より互いに面白き事を乗るべしとて打乗りける。何れも馬乗りの名人にて秘術を尽くして乗つたりける。されども何れが上手とも見えず、之に依つて兩人共に愛宕の坂を乗るべ

しとて、彼の旗本真先に乗り出し、篠崎も同じく続いて坂を見上げて乗りたりける。既に落ちんと見えて誠に危うく、身の毛もよだつて覚えたり。

兩人坂より下りけるが篠崎は鳥居のところにて振り返つて坂を詠めければ、式番と知られたり。其の時、旗本馬より下りければ、篠崎も下馬す。時に旗本篠崎に向かい「拙者は日向東蔵と申す者に御座候。今より御見知り下され候得」と申しければ篠崎も、「拙者は小田原家中、篠崎大助と申す者に候」と名乗り合つて別れたりける。

其の後、十番に於いて出会しけるが、馬上に於いて上手と呼ばれし面々十八人あり。ここにおいて尾張殿の御供先は切られける。きられ難しと申す□□争論ありけるが、篠崎申しけるは、「我等は、切る事は手の裏を返すより安かるべしと存じ候なり」と答えけるが、忝人進み出て言う様は「中々尾張殿は御大家にて殊に後乗りは屈強の名人なり、及び難し」という。「いや、我こそ切るべし」とて言募り、「然らば懸け言にすべし。勝たらん時は遊女をおごる歟、負けたらん時は尾張殿の為に一命に及ぶべし。明後日こそ上野御仏参りの帰り、黒門前にて切るべし。一丁毎に忝人ずつ遠見もつて御見物あるべし」とて約束す。さて、其の日にもなりければ、一丁毎に遠見をはり、篠崎は八汐とさえ成り難き行馬に、染め分けの手縄□□浮に居さり、松の蒔絵を置きたる鞍を置きて、かたわらへぞ引居たりける。此の時、尾張大納言殿は先歩行十二人、きらびやかにして威風堂々として歩行せたり。時に篠崎からからと笑つて鞍を直し打ちまたがって、切るも切つたり神輿の先棒を打ち払つてぞ切つたりける。「夫れ、狼藉もの切つて落とせ」というより早く、後乗りは尾州第一の名人なり、行手縄にして抜き身を提げて

追うたりける。

篠崎大助は日本無双の名人にて、上野広小路より抜身の中を乗り抜け、本郷の方へ乗り出し、中山道へ出んと巡に本郷を走る両馬が間、わずか一間ばかりにして少しも劣らず乗つたりけるが、駒込の辺にて流れ水のありけるが、篠崎夫れと見るより一角あて三間ばかりぞ乗りたる。

馬の進みけると逆さまになりて、馬の口なぞ洗うたり。彼の後乗り是を見てさても只者ならずと心中に恐れて駒の頭を引き返したり。是も名人とぞ覺えたり。抑々、尾張殿は御大家にて、後乗りは馬術の名人福田勘平という者あつて、又、此の乗り付けし馬に順風と言うは、日本無双の名馬にて布の一反を腰に挟みて乗る時はほのほのと尾を引く故に、順風とぞ名づけたり。是、篠崎にもおとらざりける。

剣術の名手ではあるが身持ちの悪い息子与九郎を戒める為、父惣右衛門は一計をめぐらす。

折節、御屋敷に鎧術の名人あつて、金成信禰(惣右衛門)が父寛信が心力を得て、聞え高く御家中へ鎧術指南致し、其の他諸大名、旗本に門弟多く繁昌する事夥しき事にて、信禰倅与九郎には鎧術并居合を教え、兵法は当流の名人濱島金太夫が門人と為し、与九郎、

幼年より修練致しけるに忽ち居合に妙を得て、柄に手をかけるところ見えて切るところ見えず。其の早業由井民部之助ともいふべき芸術、殊に年若といひ、此の勢いにて修行致しなばいかなる名人ともなるべきに、此の人にして此の病あり。

おしいかな嫉妬の心あつて、猛き人を憎み、短気にして我儘なり。父と違い身持ち放埒(ほうらつ)にして、夜毎に遠道をして辻斬りする事度々あり。誠に名人にて、抜き打ちに切る時、切られし者はを知らず、小歌を諷て五六間ぞ歩みける。

父惣右衛門この事をとめけれども、かつて聞き入れず。惣右衛門もせん方なく浅草浅草寺へ日参致しけるが、或時、雨少し降りけるが、惣右衛門夜に入りて帰宅して与九郎に申しけるは、「倅、今日御陣が原に伏し居たる乞食の有様只者ならぬ風俗なり。あれこそ天晴の芸術あるべきなり。惜しき事どもかな」と、語りける。

与九郎是を聞きて其の夜九つ頃寝間をそつと抜け出し、覚えの刀を帶し、彼の乞食をためしみると出て行きけるが、程無く彼の原に着いて、そこそこ尋ねけるに何者とも知れず、下駄をはき糞を着て、傘をさして歩行来りける。されば此の者をためしみると抜き打ちに切りかけたりしに、彼の

者傘にて受け流し爪突きて後に倒れたり。其の時一打に切りつける其の太刀を鎌にて受け止め、鎖を以て巻き取つたり。与九郎飛び下がって指添えに手をかける。彼の者透かさず鎖玉にて与九郎が胸のあたりをほらいければ流石の与九郎「うん」とばかりに氣絶しける。是、彼の者は父惣右衛門殿なり。其の後宿所へ帰り一間に入りて伏しけるが、与九郎夜明けがたに帰りける。

其の翌惣右衛門、与九郎を呼びて、「其の方昨夜は何方へ行きしや、夜明け方に帰る事心得難し」と尋ねける故、与九郎せん方なく右の次第を語りければ、父一言の挨拶もせずして「凡、日本は廣き事なれば必ず命を失うべし」と言つて己が部屋へぞ入りける。

与九郎は吉原、小川町屋敷等で奇行を繰り返す。

其の頃、捕り手の名人御抱えとなつて、是を浅尾国右衛門という。然るに与九郎、是を聞きて大きに立腹し「国右衛門もすさまじ、我立ち会わん」と申しけるを父に押えられて、是非もなき悦びといつわり国右衛門が宅へ伺公して祝儀を述べ座すい(睡)して申しけるは「今日の一興に隠れごとなすべし」と申しけるが、然るべしとて「いずれから致さん。先ず、御自分隠れて見給え、我尋ね出すべし。

其の後、又我隠れべし。其の時、御自分尋ね給うか」と申しけるに、国右衛門承知して隠れけるに、与九郎透かさず鼻を掴み、「ここに居たり」と申しければ、流石の国右衛門もせん方なく「さらば貴殿隠れ給え」と申しければ、与九郎心得たりと隠れけるに一向に知れず、所々方々を尋ね求むれども影も見えず。国右衛門方便を失いせん□に尽きて、「我には知れず、出らるべし」と申しける時、与九郎「ここに居りたり」と国右衛門が後ろに立ち居たり。之に依つて一座の人々心根に徹して感じける。

是より与九郎、国右衛門と入魂にて折々出会いしけるに、与九郎国右衛門が奥の手を見んと思ひける。謹み深き男にてかつて見せず、其の後、与九郎、国右衛門同道にて吉原に至りける。

然るに吉原に於いて、与九郎向うより来る者を抜き打ちに切り倒し、其の刀を構子の上へあげたりける。その早業目に及び難し。時に与九郎其の家に上がる。夫れ人殺しとひしめき戸を閉じ、手に手に棒ちぎりにて国右衛門を取り囲む。国右衛門一生懸命にて即時に五人を投げ殺し、木戸を飛び越し逃げうせたり。

此の時、揚屋に上がりし者は皆々刀を改めるに、与九郎も吟味を受け、事静まりて彼の刀を取って帰りけるとぞ不敵なり。

されば与九郎八丁の土手伝い、ふらふらと帰りけるところに蛇の目傘をさし、桃灯をサげ、謡を諷いながら行く者あり。与九郎後より切らんと思ひけるに透間なくして、寄る時は咳ばらいしてふり返りければ、せん方なく又候(またぞろ)よりけるに、此度は彼の者桃灯を吹き消し、傘諸ともかたわらの田の中に投げ込み、与九郎に切つてかかる。与九郎透かさず抜き合せて火花を散らして戦うといえども、追い立てられ叶うべくもあらねば、田の中へ飛び込みて逃れたり。時に彼の者ゆうゆうと「御身はいかに謝れば、かほどけなげにましますぞ」と、うたいかけの謡を諷つて歩行にける。人家近く過ぎければ、与九郎残念に思ひ、夫れより後を付けたりにけるに、築地□るこ橋の角屋敷に入りけるとぞ。

此の時分、江戸に小野派一刀流中西猪太郎、浅山一伝流森田三太夫、直心影流長沼四郎左衛門、是を三道場と申しける。是三太夫が屋敷の由、与九郎後に物語せしとぞ。

其の翌朝、浅尾国右衛門尋ね来り、与九郎に面談して色々申す。金成も「不礼の段、御用捨あれ」と詫げければ、国右衛門もせん方なく終に心打ちとけて又候吉原へぞ至りける。然るに岡部市平、島村茂右衛門一同等、与九郎此度

は大門より歩行ながら髪を結び、脇差にて髭を剃りければ、あたりの人々乱心と私語しければ、国右衛門、市平、茂右衛門甚だ迷惑し、其の後は与九郎を同道せざりける。

又、或時、金成与九郎浅草の觀音に参詣しけるに、途中にて岡部市平、田中儀左衛門に出会しける。与九郎「何方へ御越しなら候か」と申しけるに、「そこまで」と答えて行き先を語らず別れたりけるに、与九郎、ふと思ひ付、ある茶屋に上がり、我が草履取を招き、「其の方の禪を借すべし」と申しければ、下人も大きに驚き「何の御用かと存じ奉るに、是は旦那の御意とも存じ奉らず候。其の義は御免下され候得」と申しけるに、与九郎更に聞き入れず、草履取甚だ迷惑して「たして汚れております」と申しけれども「汚れたのが望みなり」と終に絹の新しきと取り換えて、家来は屋敷へ戻し、其の茶屋を出て与九郎、岡部兄弟を追つて後より飛ぶが如くに追いかけしに、八丁の土手にて追い付ける。

時に国右衛門が嘶に、岡部兄弟恐れけるが、与九郎は黒八丈の羽織に万字の紋付きたる黒小袖、越後ひらの袴、小金作りの大小、いつになき姿故さしたる事もあるまじと思ひけるが、与九郎大門を通り過ぎると間もなく、彼跨の間

より例の真つ黒き禪を引き摺りはじめれば、忽ち諸人の目に留まり、是を見る者、腹をよじつて笑う故、流石の岡部も赤面し、「此の男の様子むさい男か、禪を引き上げやれ」と申しけるが、与九郎笑い(な)がら土がついて引き上げ難しとて引きずりながら吉原を上がりける。何も与九郎に指さして、「あの髻のかたびつこの男、先達も扇子屋にて紙袋より虱を出して、傾城に振り掛けて難儀させしなり。誠にいたずら者にて物好きの事よ」と申しける。

時に与九郎吉原を遊廻して帰るさに病犬一疋飛び来つて喰ひかかる。其の時、与九郎袂よりしずかに手拭いを出しければ、忽ち是に喰ひ付たり。其の時左の手に引摺り上げて、脇差を抜きもつて首を落としたり。其の有様造作もなかりける。其の後与九郎小川町の屋敷に帰りける。此の頃、父惣右衛門、弥兵衛と改名す。

或時、金成与九郎御召出しに相成り、御使者として奥平膳太夫へ遣わされけるが、元来いたずらの金成与九郎なれば、口上御取次にも聞き取れぬように述べければ、取次も難儀して硯箱を持参して「一筆御認め下され候え」と申しければ、畏まり候とて与九郎硯箱を引き寄せ墨を摺りけるが、朝五つ時過ぎより昼過ぎまで墨を摺りければ、御取次もあの使者は無

筆にや、気の毒のことよと思いつて「空腹に相成り候間一服を御取持ち下され候え」と望みければ、いよいよ気の毒に思いつける。時に此の事忽ち屋敷中に聞こえて、屋敷の者ども大久保より参りし使者を見んとて客間の唐紙より人々覗き見るに、髭のかたびつこの男、飯を食い居たりければ、是を見る人皆々笑わぬはなかりける。時に与九郎鼻の先に飯粒を付ける故、人々わつと言つて逃げ出す。与九郎後にてゆうゆうと飯を食い、八つ過ぎまで墨を摺り、竹墨八部通りおろし、懐中より白紙を出し、美しき手蹟にてさらさらと認め取次に渡し、一礼してぞ帰りける。是より金成与九郎が名蹟、奥平の家中に於いて三歳の小児も其の名を覚えて語りける。

大力の島村茂右衛門は捕り手の名人浅尾国右衛門との組打ち後、悪魔をしたことで小田原に帰る。是は扱置き、御近習衆に島村茂右衛門という大力無双の者あつて常に捕手を卑下し居たりけるが、終に此の事御前に聞こえて、「成程、茂右衛門が言うところも尤もなり。されば此の頃召し抱えたる浅尾国右衛門という者へ申し付け、島村と組打ち然るべし」と、其の趣浅尾へ仰せ付けられ、御庭に於いて君も御透見遊ばされける。

扱、其の日にもなりければ、御庭に幕打ち廻し、一家中の曆々(歴々)伺公せり。やがて国右衛門東の方より出、茂右衛門真中にある。其の時、国右衛門扇子をもつて踊りをなす。其の有様おかしき事たとえ難し。伺公の人々是に眼を付け居たりしが、茂右衛門思

わず見物なしたりける時、国右衛門は茂右衛門が笑うを見ると、ひとしく真うつむけに投げ出し乗りかかりて、脇の下をくすぐりながら指を元結にて高小手手にしめ上げたり。其の早業いふばかりなし。流石の茂右衛門力を入れる間もなく投げ倒され、其の上元結にて指を縛られたれば、切ることもならず、茂右衛門はじめ伺公の人々感にたえける。然るに両人大儀に思召す由有難き御意を蒙り、我屋敷にぞ引き取りける。

此の茂右衛門、其の後火消頭仰せ付けられ相勤めける。是は翌年の事にてありけるが、愛宕下出火にて殿様の御人数寺内へ相詰めける。其の節茂右衛門、天水桶を差し上げてかけろかけろというて屋根へ差し上げれば、鳶の者ども大きに怒り「いらぬ世話する士か」と申しけるが、打ち殺さんとひしめきける。此の事御前へ聞こえ御首尾悪しく御免にて、跡役三幣又左衛門へ仰せ付けられ、御国勝手仰せ付けられる。之に依つて小田原へ至りけるが、岡部市平と共に藤沢宿遊行寺の相撲に至り、青竹を掴みひしきて腰に巻き、「一番とらん」と言いけるに相手になる者はなかりける。然し乍、島村は五尺七寸の男なり。岡部市平の供となつて至りしとぞ。市平は身の丈六尺四寸の男にて、黒二重の小袖、紅裏御免にて其の袖口耆尺三寸ありしとぞ。古今珍敷美男なり。今の世までも嘶伝いに残りける。(つづく)

初詣「池上本門寺」と「六義園・日本民芸館」

文・絵 田中 豊 みのる

一月二十日、小田原史談会の初詣は今年も冬の抜けるような快晴に恵まれたが、さすが大寒、頬をなでる風は冷たかった。出発の八時を向かえるも、日頃何事にも正確なS氏の姿はなく、幹事が自宅に電話するとまだ在宅！。諸

事の為「今日の初詣を忘れていた」と・・・。予期せぬハプニングで、シルバー大学九期会九名の方々を加えて二十七名の出発となった。昨年には比べるといささか淋しくはあったが、バス内は「今年も宜しく・・・」等々初詣の旅

らしい華やいだ声が飛びかいそれを補っていた。

小田原厚木道路を經由し東名へ。十時三十分、第一見学地「六義園」に到着。

都立庭園『六義園』は徳川五代將軍綱吉に側用人として仕えた柳沢吉保が元禄八年(一六九五)拝領した下屋敷に造営された庭園である。さすが当時権勢を誇った吉保が綱吉のお成りを念頭に二万七千坪余に土を盛り山を築き、

水を引き池をなした見事な回遊庭園である。柳沢家の息、吉里の代に大和郡山に移封になるが、幕末の頃は荒れ果てていたという。明治の初年三菱財閥創始者、岩崎弥太郎の手に渡り再び庭園として蘇えり、昭和十三年(一九三八)に東京市に寄贈された。四季折々の花が咲き、緑豊かな樹木の景観はこの季節に望むべくもないが、門を入ると名代の枝垂桜が地に触れんばかりに枝を流し、最盛季

の見事さを彷彿させてくれる。満々と水を湛える広大な池の周りには周遊路がされ、池面樹々を写し、雪吊りと茶屋の織毛氈の対比が目を和ませる。池のどの位置からもそれぞれ美しく、藤代峠からの展望、渡月橋の大岩の重厚感、点在する東屋の風情は私達を飽きさせない。それぞれの四季の姿を見たいとの誘惑にかられる。

### 雪吊りのゆがむ影置く水鏡

散策の途中、先述のS氏から平倉会長に携帯電話が入り、「今、池上本門寺に来た！」との報、いつもながらのフットワークの軽さと責任感に感嘆するのみ、日本民芸館で合流を約す。十一時三十分六義園を辞し、浅草昼食の定番「ごろごろ会館」にて食事。会館内はさすが浅草、食事する人、土産を買う人でごった返していた。十二時三十分、程近いスカイツリーを左に、正面にバスは街を縫

### 浅草で買った駄菓子



って駒場に向かう。日本民芸館への道は狭く、バスが停車出来ず止むなく立ち並ぶセレブな住宅街、駒場公園(前田侯爵邸跡)の周囲を歩くこと十五分余、十三時五十分、漸く日本民芸館に到着した。

『日本民芸館』は美術研究家・思想家で民芸運動の主唱者の柳宗悦が、大原孫三郎(クラレ、大原美術館創設者)の援助のもとに昭和十一年(一九三六)に無名の工人による工芸品「真の美」を広く紹介するため収集品を寄贈し創設した。大谷石の門の奥には木造瓦葺大谷石のなまこ壁二階建の蔵造り建築。道を挟んで建つ栃木から移設された石屋根根長屋門と対を成し、何処か懐かしさを醸す。内部も入口は大谷石を敷き、中央の階段を挟んで太い梁・柱に板張りの床、障子張りの柔らかい採光がほどこされている。

この期間、館では「文字の美―工芸的な文字世界―特別展を開催中で学芸員の説明を受ける。従来の慣習にこだわらず柳宗悦自身が美しいと感じた文字(又は拓本)は和紙の柔らかさと同化し、文字の領域を超え墨と空間の黒白の中に美しさを感じさせていた。展示品の説明文も意識して少なくし、物の美しさを自ら感受し、知識で物を見るのではなく、直観で見える事を求めているという。古い和紙に拓本された「梁武事

仏」の模様化された文字と、その前に置かれたかすかに紅をにおわせる白磁大壺(明時代)が私の目を奪った。他の展示品も朝鮮・日本の名も無き民衆の中から生まれた陶芸品・染織・漆芸品・紙工芸品・民具が多く、民芸運動に携わった富本憲吉、河井寛治郎、浜田庄司、芹澤鯉介、バーナード・リーチ等の文字を配した小品・佳品も並び嬉しい。

### まだ残る寒さ薄日のなまこ壁

十四時三十分館を後にして初詣の池上本門寺に向かう。車中予備知識として杉山理事提供の池上本門寺のDVDを観る。熱心な法華宗の帰依者、加藤清正の寄進による九十六段の石段を登ることなく、バスは馬込側から貴船坂を登り大堂(祖師堂)裏に到着する。

『長栄山池上本門寺』は日蓮聖人の終焉の地、池上宗仲館の近い山中に弘安五年(二二八二)開堂、日蓮の後継者の一人日朗が承継した古刹である。江戸時代には紀伊徳川家等の庇護のもとに諸堂が整い、日蓮宗七大本山の一つで



多くの参詣者が訪れたという。早速大堂前で読経を背に集合写真撮影。

この大堂は慶長十一年(二六〇六)、加藤清正が母の七回忌追善供養に建立されたが焼失、享保八年(一七三三)に八代将軍吉宗の用材寄進により再建された。しかしこの二代目大堂も昭和二十年(一九四五)の空襲で焼失、二十三年仮祖師堂を経て、昭和三十九年(一九六四)全国の檀信徒の寄進によって現在の鉄筋コンクリート造、屋根は入母屋の大伽藍が再々建され、更に平成十七(十八)年には屋根瓦修復や耐震防火対策工事が行われた。まさに祖師日蓮の不屈の生涯に似た再建への道をたどっている。堂内は見上げるような朱柱と覆われた金色の天蓋。本尊と共に



日蓮聖人の座像(国重文)が安置され、静から動への太鼓と共に多くの僧侶達による読経が響いていた。拜殿の天井には馬込に在住した巨匠川端龍子画く「未完の龍」が踊る。

境内を各自散策。大堂の正面を行けば表参道で先述の清正寄進の九十六段坂に達する。法華経宝塔品の偈文の字数に因み九十六段の石組で出来、「此経難持坂(しきょうなんじざか)」が正式の名称とか。この石段は創建当時の姿を残し、更に下れば本阿弥光悦の筆(複製)に掲額がかかる総門に達し、門前町の風情も味わえるのである。ところがそこまでの下段は断念。ただ少し石段を降ったご褒美に創設当時から石組と、修補のため打たれた礎石との面白い図形を味わった。石段から見上げると姿をあらわす朱塗りの仁王門の姿は格別のものであった。

仁王門仰ぎて上る初詣

仁王門は戦災で焼失した国宝の山門に替るもので、昭和五十八年(一九八八)に再建された。右手に歩を進めば北村西望作の経文を右手に掲げる「日蓮聖人大立像」で七行八難を超え、既成宗教の怠惰を看破し国家安泰、民衆救済を主張した気概に満ちた雄姿を現わす。説明文によればアルミ製と

いうのが面白い。更に進めば戦災も免れた高さ三十七・八米、ベンガラ朱塗の五重塔(国重文)が夕暮の空に聳え立つ。

冬茜一筋に立つ塔を染む

周りには供養塔・古墓石が立ち並び、格式ある人のものと思われるも刻字は定かでない。資料によれば紀伊徳川家の姫君・側室などの大名墓、新しくは幸田露伴・力道山・十一代目片岡仁左衛門・市川雷蔵・河上彦斎・大野伴陸等々著名人の墓所があるとのこと。大堂左手には戦災を免れ天明四年(一七八四)建立の「経堂」が素朴な姿を残していた。

散策予定の一時間は東の間に過ぎ十六時本門寺を後にした。近くに西郷隆盛、勝海舟の江戸城明け渡しの見会の場「松濤園」があるとのこと。又の機会に訪れることを肝に命じた。

雑談、微睡むうちに東名に入り海老名SAで小休憩、土産を買増し、東名・小田厚を乗り継ぎ夕暮迫る小田原駅に十七時半無事帰着した。

今回の旅は見学箇所が散在していた為か乗車時間に比し各見学時間が短くも感じたが、それぞれにそれを補う満足感充分の旅であった。企画者に感謝!

(二〇一五年一月記)

聞き耳

○倒判(さかさはん)

大久保忠真侯について一寸お話したいことがあります。

それは始て樂翁公(松平定信)の推薦で以て御老中になられたとき、間もなく何か連判の文書が廻つて来ました。御内筆といふのが幾たびも幾たびも念に念を入れて文書をつくる。それが右筆(祐筆)の處へ来て立派な大奉書へ書かれる。そこで古參の御老中から順番に印をつけて、最後に新參の忠真侯へ廻つて来た。

右筆がヂット見て居ると忠真侯は印籠から印を取り出されたが、故意か過失か、押された印形は倒さ(さかさ)であった。

忠真侯はそのま、獨りで恐縮してござる。右筆どもは驚いた。

新參の大久保侯なれば殊更に間違いなきよう心得らるべく苦なるに、さりとは餘りに輕はづみの大久保侯かなと、取り取りにの、しり合ふたとのこと。

無理もないのです。文面は書き直さねばならないし、印形も古參の御老中から改めて貰はねばならぬけれども、已(や)むを得ぬ所から古參御老中へも大久保侯の失錯を披露しまして、書き直すことになりました。

右筆の者が小言たらたら書き直して見ると「こはいかに全く右筆の粗忽」古參御老中が盲判をついたのであった。大事の文面に一字抜けてゐた為め意味が全く反対になるといふ始末……

それを其儘公儀へ差出したとすれば、一同恐れ入るの外はないのです。右筆は思はず「アア大久保殿に助けられた」と嘆息しました。

一体殿中では右筆や御内筆や、それから御老中に附添の御箱など、いふものは、一切の儀式や格式をよく心得てゐるので、新參の大名はいつでも此等に苛められるのが普通なのです。

所が大久保公の振舞は一同を痛く感服させたので、流石は松平越中の眼鏡に叶ひし若殿なれといって、一時に其事が殿中の大評判となつて新參ながら大層都合がよかつたといふことです。

岡本隆徳「斯民(しみん)」

(『小田原史稿本』より)

(注)

※岡本隆徳「明治・大正期の書家。元大久保家家臣で脱藩して旧萩野山中藩士。皇居前広場「楠正成像銘板」は隆徳の揮毫である。

※斯民「中央報徳会機関誌」

「二宮翁の逸史蹟」第二編第六号参照

(石井啓文)

小田原の街角写真今昔 ④

(岡部忠夫先生アルバムより)

植田 士郎

今回は南町(旧十字町、幸町)を中心に新旧の写真をご紹介します。前回より更に東に向かい旧幸町、本町を中心にご紹介していきます。



2015年3月

最初は懐かしいオリオン座です。多くの市民を楽しませてくれた映画館も2003年(平成15)に閉館となり、跡地はマンションになっています。



1967年3月



2015年3月

上の写真は更に東へ50メートル行ったところの蒲鉾店3軒の今昔です。48年の歳月は店舗の形態も大きく変えたようです。



1967年3月



2015年3月

上の写真はお堀の内側、旧城内小学校で、現在は日本町小学校と併合して本町小学校の跡地に三の丸小学校として生まれ変わっています。現在、城内小学校の跡地は屋外イベント用に活用されており、奥に小田原城歴史見聞館があります。



1967年7月



2015年3月



1968年12月

最後はお堀端通りから国道1号線に抜ける通りです。通りの左側に老舗の「田毎」が見えます。47年の時の流れを実感させる一枚です。旧写真の奥に中央劇場の正面が写っていました。

平成27年度「小田原史談会」

## 総会・講演会のお知らせ

下記により「平成27年度小田原史談会総会・講演会」を開催します。会員各位には是非多数ご出席くださるようご案内いたします。なお、総会終了後の「講演会」には会員以外の方もご出席いただけますので、お誘いあわせの上、多数のご参加をお待ちします。

記

日時：平成27年5月9日(土曜日)

- ・総会 午後1時より ・平成26年度事業報告並びに会計報告  
・平成27年度事業計画並びに予算計画

・講演会 午後2時より

演題 「大老堀田正俊刺殺の真相」

—小田原藩主稲葉氏一族も関わり、老中大久保忠朝の眼前で起きた事件—

講師 下重清氏 (東海大学文学部非常勤講師)

参考文献：下重清『幕閣譜代藩の政治構造』(岩田書院)

場所：小田原市民会館 6階 第7会議室

小田原史談会5月の研修会ご案内

## 小田原城総構を巡り歩き 新しい歴史発見をしよう

今回は、史談会理事の杉山虔一氏に案内していただきます。

日時：平成27年5月22日(金) 小雨決行

集合：小田原駅東口 二宮金次郎像付近 午前9時 (帰着：板橋見付 午前11時30分頃)

参加費：500円 (資料代・保険料 当日、現金で集金します)

コース：小田原駅発 — 井細田口 — 山側を2時間余歩く — 板橋見付(解散)

定員：20名

申し込み：平成27年5月10日(日) 午後1時～8時

11日(月) 午前9時～午後6時

電話 0465-22-1076 内田まで

歩きやすい服装・履きなれた靴で参加しましょう。

キャンパスおだわら学習講座<公募型市民企画講座>

新シリーズ「小田原の歴史を掘る」開講!

## 歴史講座 『小田原史談会セミナー』 第9回

日時：平成27年5月30日(土) 午前10時～12時

場所：小田原市民会館 5階 第3会議室

講座：『旧石器・縄文時代の小田原』 講師：土屋健作氏

申込先：☎ 0465-33-1890 小田原市生涯学習センターけやきの会

定員・費用：50名 500円(資料代込)

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

和 そうぼん 小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **まろは**

**伊勢治書店**

茶半家具株式会社

 **かまぼこ**

**ちん里う本店**

(株) **オクツ薬局**

割烹料理 **鳥かつ楼**

 **小田原ガス**

和菓子 菜の花

小田原報徳自動車

杉崎茂法律事務所

かまぼこ籠 **清**


平井書店

かみやま小児科クリニック

(有) **古屋花店**

**興電社**

株式会社 **報徳**

創業四百年有命  
 **料理茶屋 小伊勢屋**

建築金物 (株) **星崎仲吉商店**  
家庭金物

(有) **小松石材店**

**本多時計店**

**COMTEC コムテック株式会社**

学生専科  **マルク**

**さがみ信用金庫**

曾我の梅干 塩辛・かまぼこ **美の政**

(株) **アルファ**

小田原史談(年四回発行)  
創刊昭和三十六年一月  
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円  
〇〇三〇三二八四三三六  
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

今号から荒河純さんによる「小田原桐座について」を掲載します。石井富之助さんは「いずれは小田原桐座の研究として発表しようと考えて(史談再録参照)」いたものの果たせませんでした。荒河純さんが五十年後にその遺志を受け継ぎました▼最近、鴨宮の飯山家から発見された古文書の中に一般の農民が素朴かつ素直な言葉で家の歴史を綴った貴重な文書がありました。石井啓文さんがその全文を解説し解説します。是非ご一読ください▼宮原諄二さんは久所に移って三十四年。地元の歴史を昨年調べたものが「久所のむかし話」です。その結果「身近な風景・周囲の人たちとの会話が新たな意味を持って命を与えられたように輝き始めた」とのことです▼先号より始まった「片岡日記」ですが今号は一頁のみとなったこととお詫びします▼山田彰夫さんが松永耳庵との交流を先号と同様小田原弁を交えながら語ります▼鳥居泰一郎さんの「小田原大秘録」ですが剣術の名手と九郎の吉原・小川町屋敷での奇行に思わず吹き出してしまいました▼茶道・陶芸・俳句と、何でもござれの田中豊さんの味わい深い初詣紀行文をお楽しみ下さい▼植田士郎さんが紹介する岡部忠夫先生の写真は一九六七年。英国からツイッギーが来日しミニスカートが大ブームとなりました▼剣持芳枝さんの俳句は大震災前の東北の春を詠ったものです。一日も早い復興を望みます▼四月から新年度。より良い紙面づくりを目指します。

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四、一、二四

電話 〇四六五三三三八六三五

松島俊樹